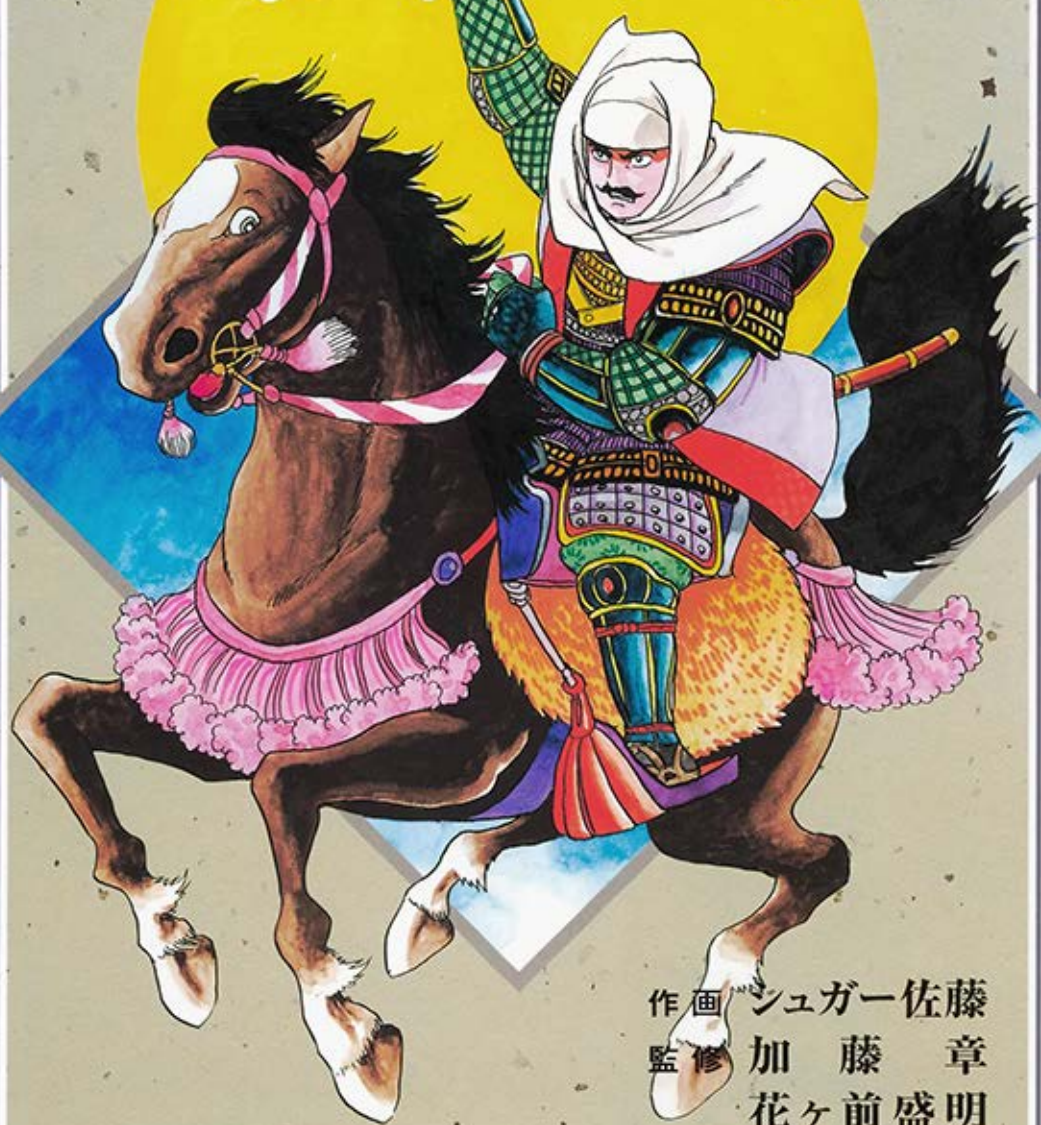


まんが

上越市発足30周年記念事業

上杉謙信ものがたり



作画 シュガー佐藤
監修 加藤 章
花ヶ前盛明

まんが 上杉謙信ものがたり



目次

【まんが】

第一章／越後統一	1
----------	---

第二章／関東管領への道	
-------------	--

└宿敵武田信玄の登場┐	43
-------------	----

第三章／決戦川中島	93
-----------	----

第四章／関東平定、そして	
--------------	--

上洛への夢	125
-------	-----

【資料編】

主な登場人物	155
--------	-----

越後上杉氏家系図・長尾氏家系図	156
-----------------	-----

上杉謙信の足跡	158
---------	-----

決戦／川中島の戦い	160
-----------	-----

謙信の人柄	162
-------	-----

謙信の学問と信仰	164
----------	-----

謙信がもたらした産業の発達	166
---------------	-----

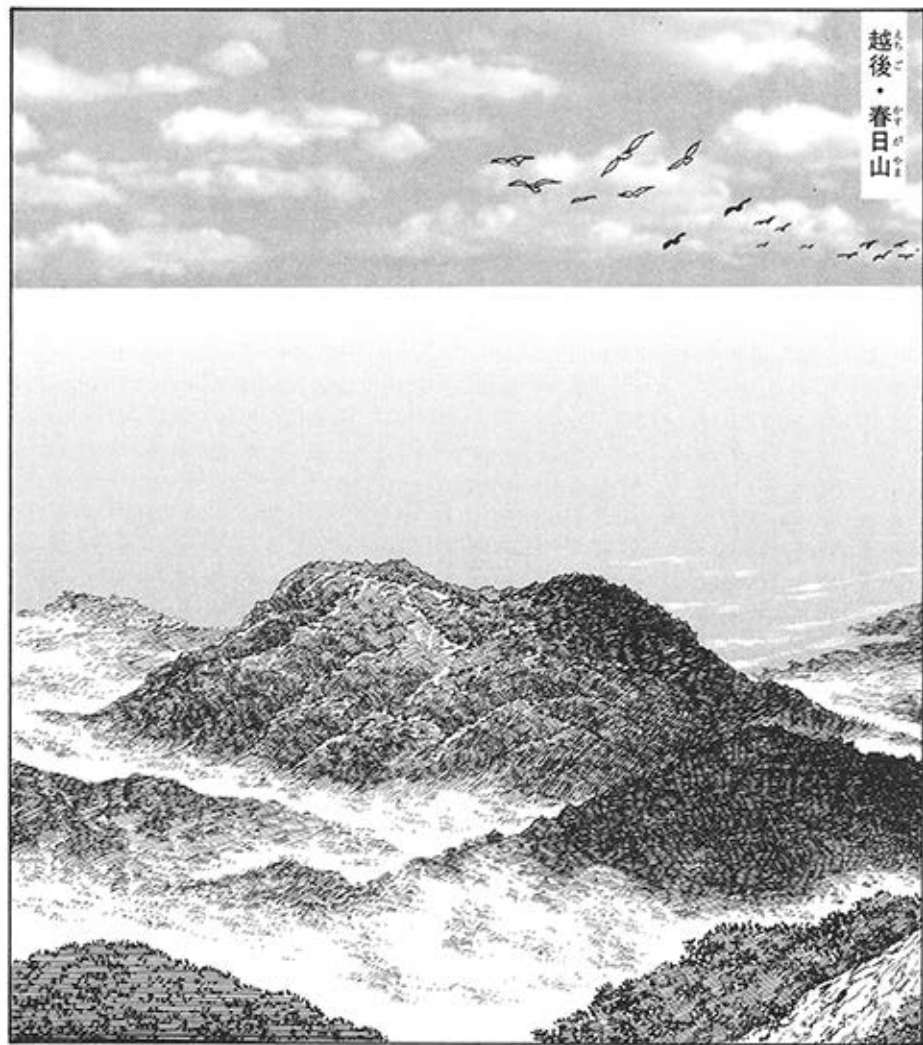
春日山城のしくみ	168
----------	-----

謙信と出会う、春日山めぐり	169
---------------	-----

上杉謙信 略年譜	176
----------	-----

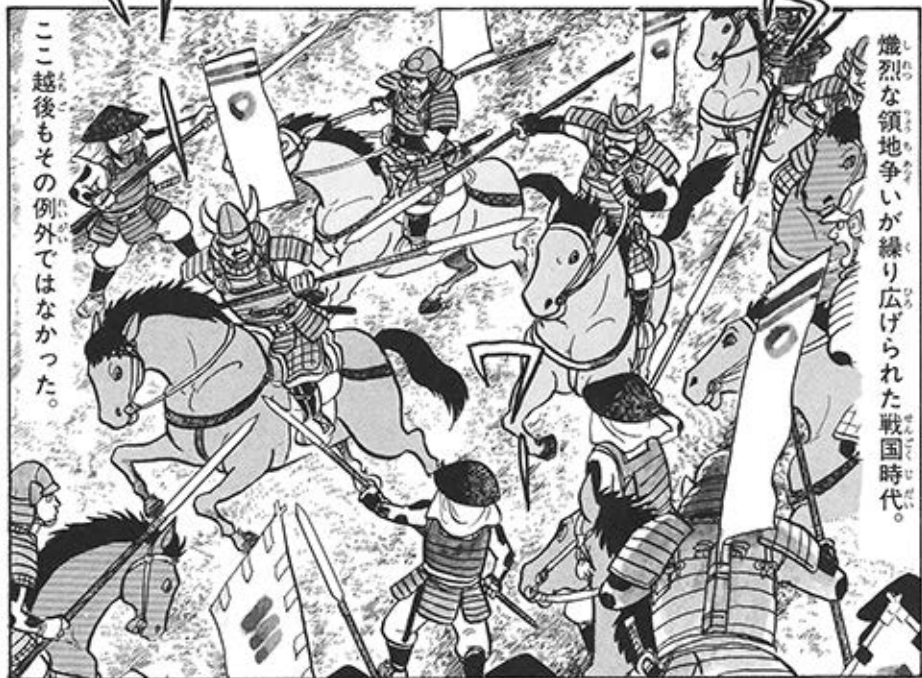
第 1 章

越^{えち}後^ご統^{とう}一^{いつ}



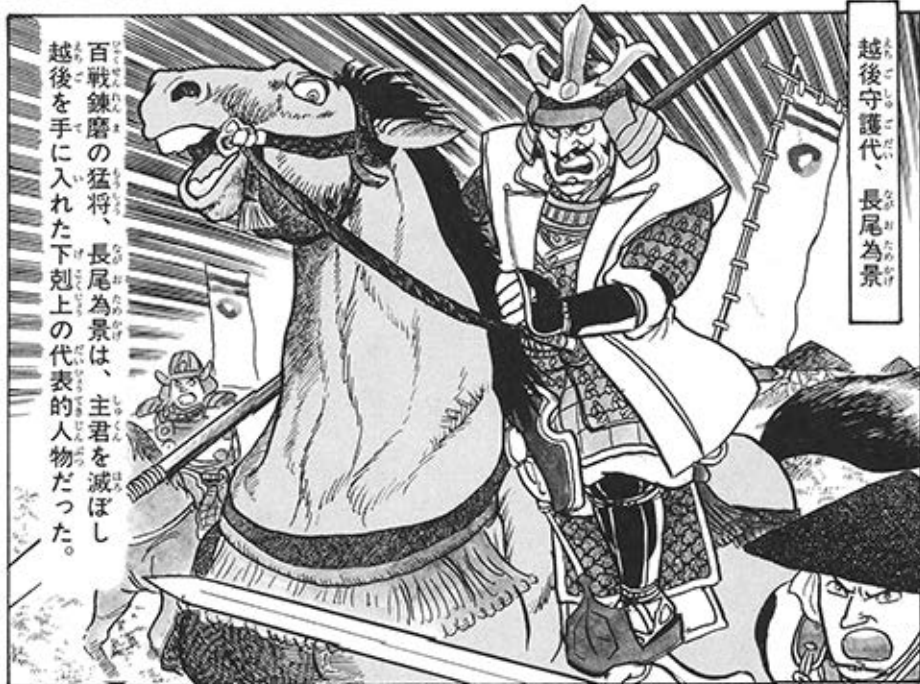
熾烈な領地争いが繰り広げられた戦国時代。

ここ越後もその例外ではなかった。



越後守護代、長尾為景

百戦錬磨の猛将、長尾為景は、主君を滅ぼし越後を手に入れた下剋上の代表的人物だった。





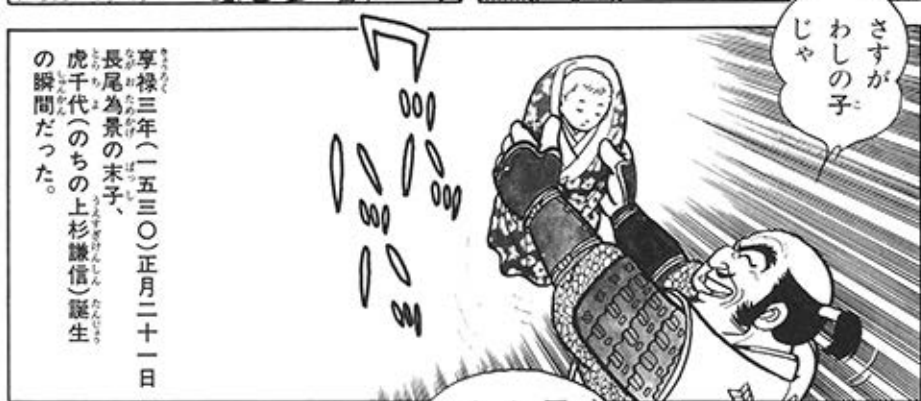




顔き
おったわ



さすが
わしの子
じゃ



享禄三年（一五三〇）正月二十一日
長尾為景の末子、
虎千代（のちの上杉謙信）誕生
の瞬間だった。



殿
以前 仏さまが
わたくしの夢枕に
立ったことが
ございました

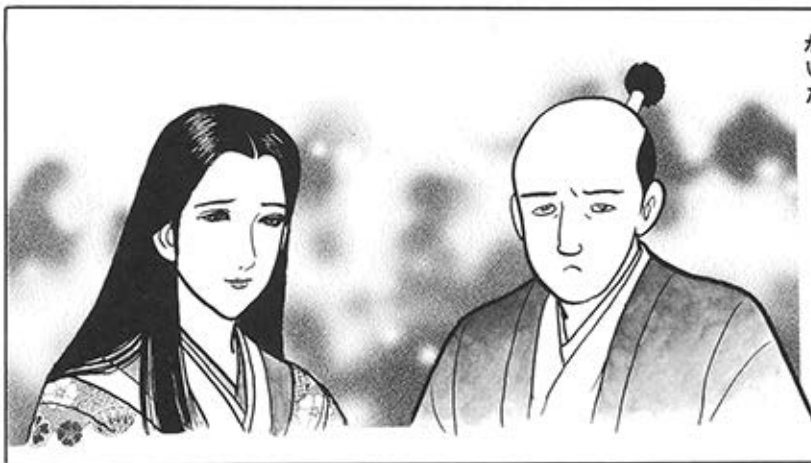
すると
不思議な
ことにすぐに
この子を授か
ったのです

ほほう
するとこの子は
さしずめ軍神
毘沙門天の生まれ
変わりかのう



戦国史上稀にみる
名将として、歴史に
その名を轟かす存在
になろうとは、この時
誰が想像できた
だろうか。

虎千代には十八歳年上の
長尾家嫡子、兄晴景と、
姉仙桃院
がいた。



上杉家は足利氏と姻戚関係に
ある名家で、室町初期から
越後守護として君臨してきた。

上杉家



足利家



景忠



景恒



上杉憲顕



一方長尾家は元々は相模の豪族だったが、長尾景為の時から上杉家の
被官となり、南北朝の動乱期にその子景忠・景恒が上杉憲顕の
執事として越後へ下向。
上杉憲顕の越後守護就任とともに守護代となり、以後上杉家を
もり立ててきた。

しかし戦国の流れと共に
上杉家は弱体化。

為景の代にととうと
守護上杉房能を討つ。



おのれ
為景!

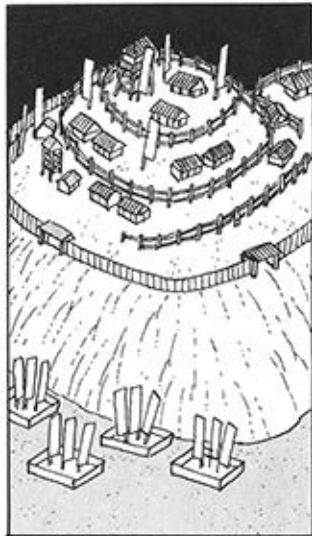
弟の
仇討ちじゃ
ッ!

関東管領、
上杉顕定



越後に進撃した房能の兄で関東管領の
上杉顕定も討ち取り、為景は事実上の
越後国主の座を勝ち取った。





また
そのような
遊びを

血は争え
ないこと

さあ
虎千代

仏さまに
お祈りをする
時間ですよ

よいですか
虎千代

仏さまを敬う心を
決しておろそかに
してはなりません

お前が将来
辛い思いや
苦しい立場に
たった時
仏さまは必ずや
お前を助けて
くれます

熱心な親音菩薩の信者だった
母の下で、虎千代は信仰心の
あつい少年へと成長していく。

後の熱烈な毘沙門天信仰は
この母の影響が強いと
いわれている。



七歳の時、
虎千代は春日山城下の
長尾家菩提寺、
林泉寺に預けられる。



行って
まいり
ます！

これを
母と思
修に励
ますよ



母は
上



林泉寺住職
天室光育

長尾虎千代に
ございます

よろしく
ご指導のほど
お願い致します！

そなたが
虎千代殿か

かしこそうな
お子じや

名僧とうたわれた光育の下で、虎千代は
禪の修行と文武の道を学んでいく。



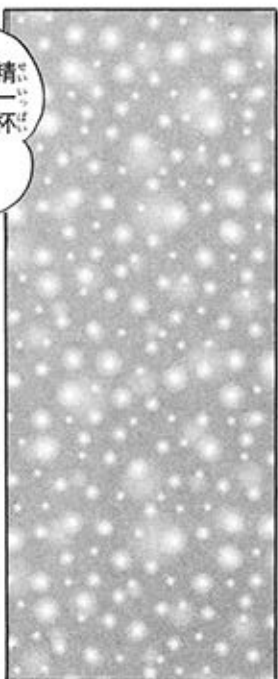
今に残る天室光育の十徳に幼い頃の厳しい修行を
窺い知ることが出来る。
名将謙信の素養は、このとき培われたといつてよいだろう。



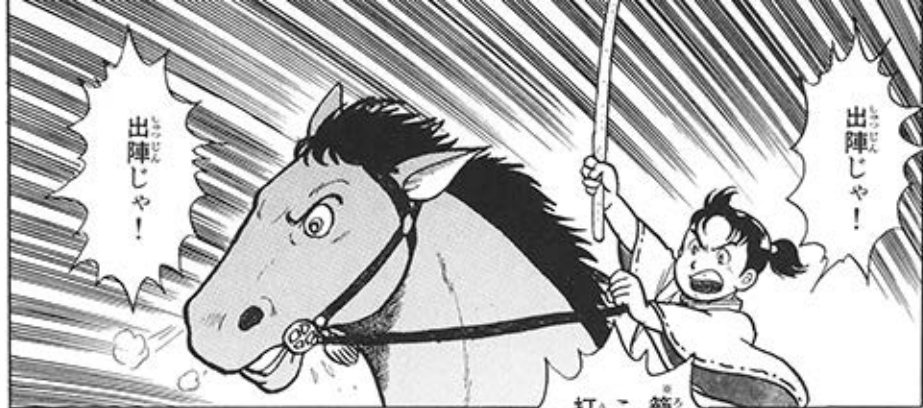
※十徳：10種類の道徳的な教え。



精一杯
気を張って
います
やはり子供





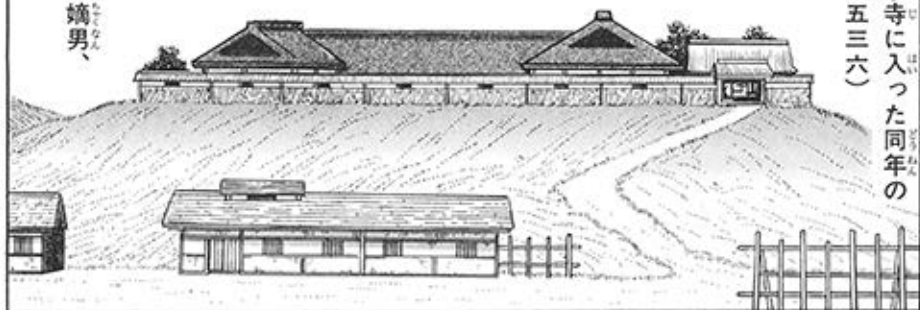


※龍城：城の中にたてこもり、攻めてくる敵を防ぐこと。



虎千代が林泉寺に入った同年の
天文五年（一五三六）

為景は家督を嫡男、
晴景に譲る。



体が弱く覇気のない晴景は武将としての器量に乏しかった。

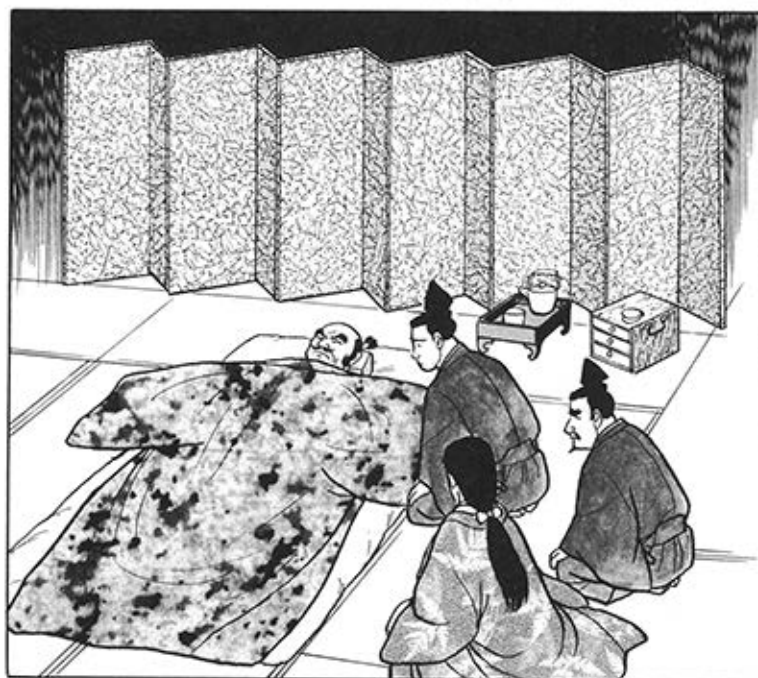


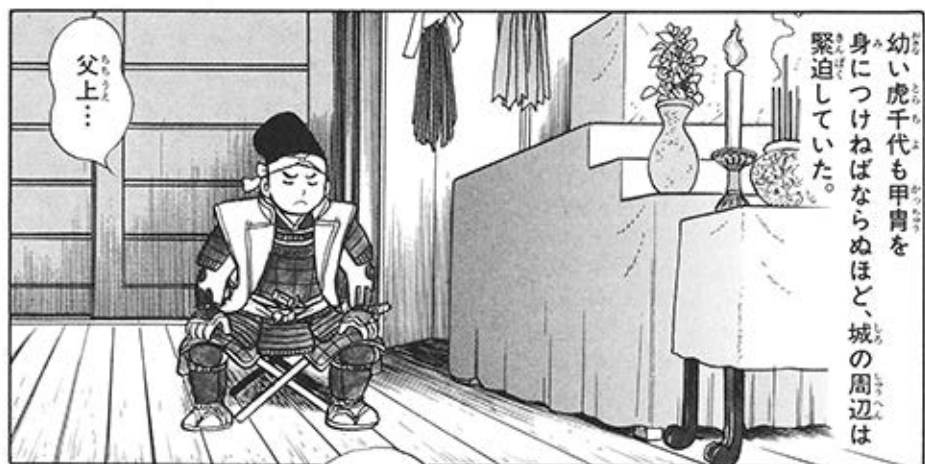
父君の
為景様に
比べてなんと
頼りない
若殿か

これでは
長尾家の
行く末が
案じられ
るぞ



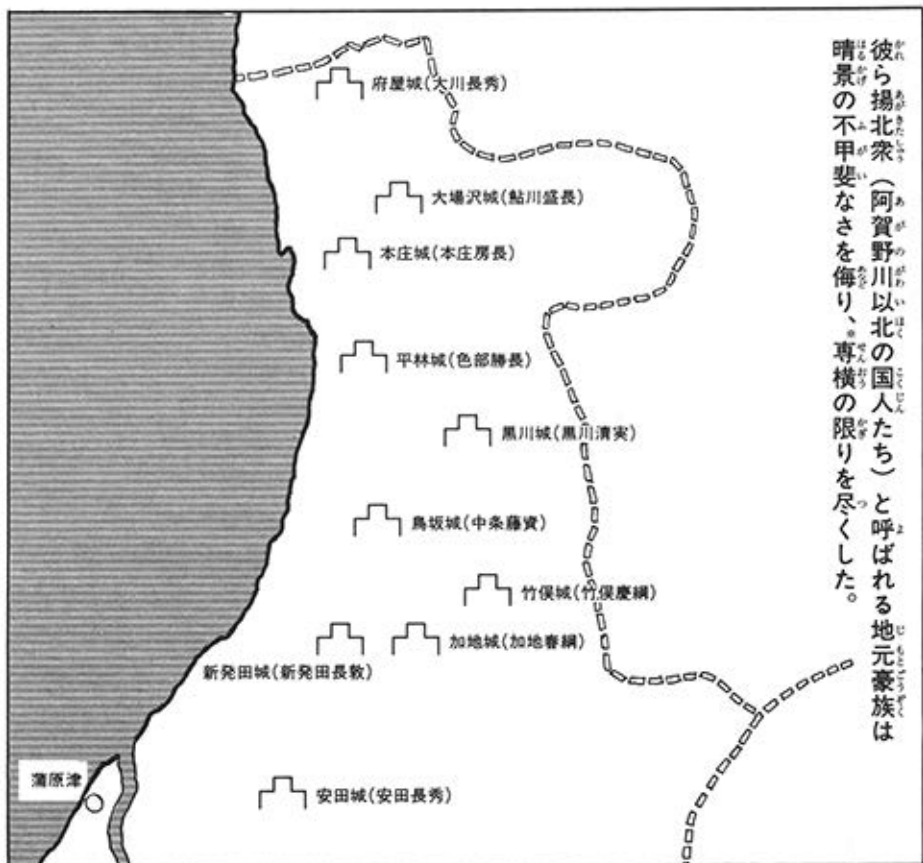
家臣達の不安に追い打ちをかけるように同年暮れ、
父の為景が病死する。
越後平定を目指し、百回以上もの合戦を勇猛果敢に
駆け抜けていった壮絶な生涯だった。





晴景の代になり、
越後の情勢はますます
荒れていった。



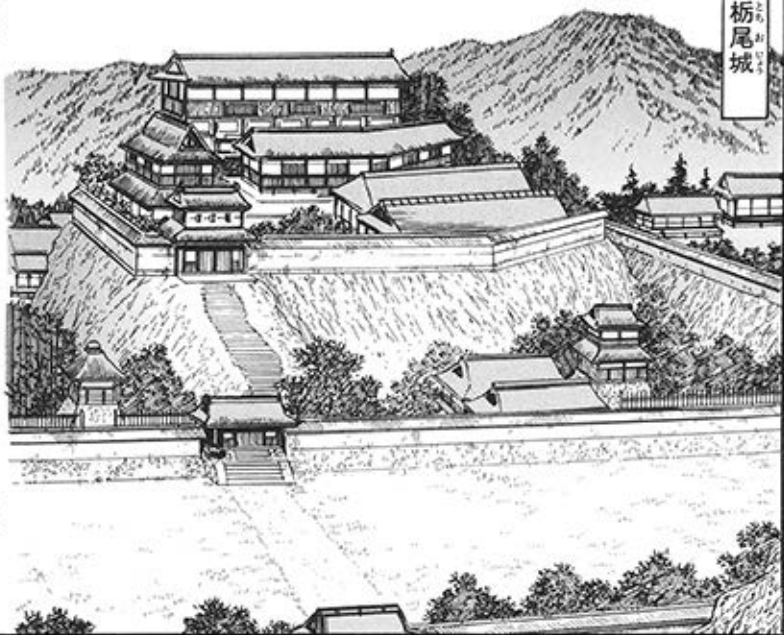


※専横：わがままで勝手な行動





栃尾城



天文十二年（一五四三）兄、晴景の命により元服した
虎千代は、名を長尾平三景虎と改め、三条城を
経てこゝ栃尾城に入城した。



翌十三年、雪が消えると近隣の豪族たちが
景虎を若年と侮り、方々から攻撃をしかけてきた。

俺の武将人生が
ここから始まる





※小荷駄：馬などにつけて運ばせる荷物。また、合戦に用いる兵糧などを運ぶ輸送・補給隊のこと。



かかれーッ

かかれーッ



景虎を援護するのは本庄実乃、山吉行盛、そして母虎御前の実家、栖吉城衆らだった。

あつという間の形勢逆転。鮮烈なデビューだった。



この勝利をきっかけに、景虎はその名を国内中に轟かせることになる。

黒滝城



守護上杉家の老臣、
黒田秀忠



天文十四年（一五四五）、春日山城で謀反を
起こした秀忠は黒滝城に立て籠もり
反乱を起こした。

諸將を従えた景虎が討伐に向かった。



景虎の威勢に恐れをなした秀忠は、僧になって他国に行くことを誓い、
一旦は許されたが、翌年また反乱を起こし、討伐される。

命だけは
お助けを！





晴景は弟に脅威を感じていた。
 景虎の武力に屈するというよりも、彼の才智、武将としての
 仁徳に心を寄せ始める豪族たちが少なくなかったからだ。



景虎の叔父、
高梨政頼

楊北衆、
中条藤資

栖吉の
長尾景信

武将としての素養に欠ける晴景に代わり、景虎を守護代に仰ごうと景虎派が擁立に動く。



なにっ！

景虎が
わしの後釜を
狙っているの？

そのような
不穏な動きが
ございます

晴景の義弟、
坂戸城主上田長尾政景



おのれ
景虎
……

引き立てて
やった兄への
恩を仇で返し
よって！



兵を挙げ！

景虎を
討つツ！

晴景は、長尾政景の援護
で景虎討伐に動き、二人
の関係は一気に緊迫する。

殿！

ご決断を！

春日山城を
今すぐ攻め
込むのです！

我々は殿に
ついてゆき
ます！

景虎は苦悩した。
越後のために立ち上がらねばと思う一方で、
向けることが躊躇された。
この優しさが景虎の戦国武将として稀な美德であり、
同時に弱点ともいえた。

殿ッ！

血を分けた兄に刃を

越後守護、
上杉定実



上杉定実は、為景が上杉房能を討った後、後釜に据えた人物で、守護とは名ばかりの人物であった。



しかし今回、その守護の立場を利用し、景虎と晴景の和議の調停を買って出る。

晴景殿

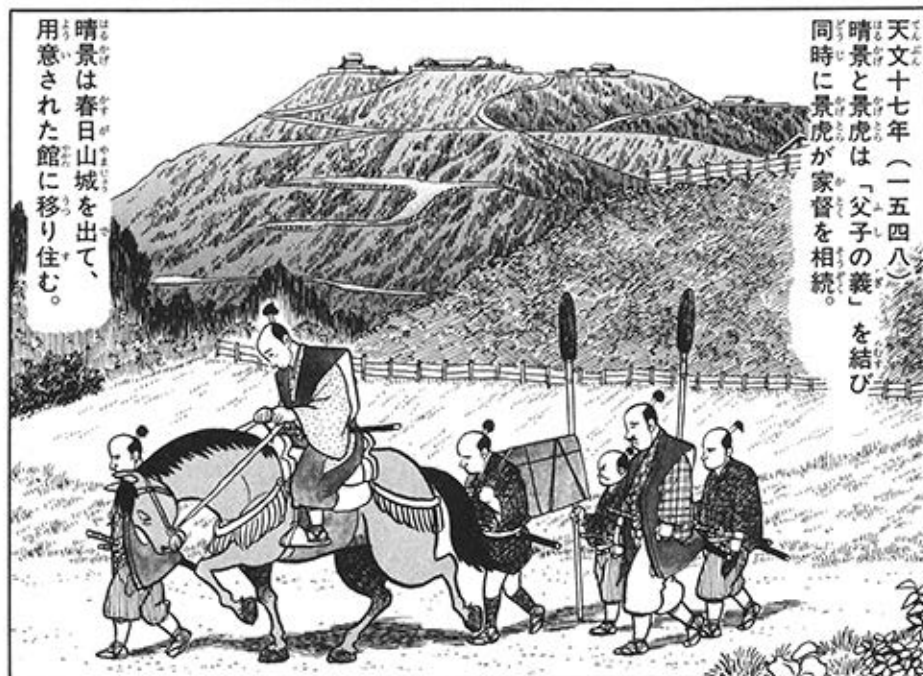
今の緊迫した越後の情勢を考えれば兄弟で争っている場合ではあるまい

わたしに
どうしろと
おっしゃる
のです？



ずばり
景虎殿を
養子に迎え
晴景殿は
隠居なされる
ことを勧めに
来ました





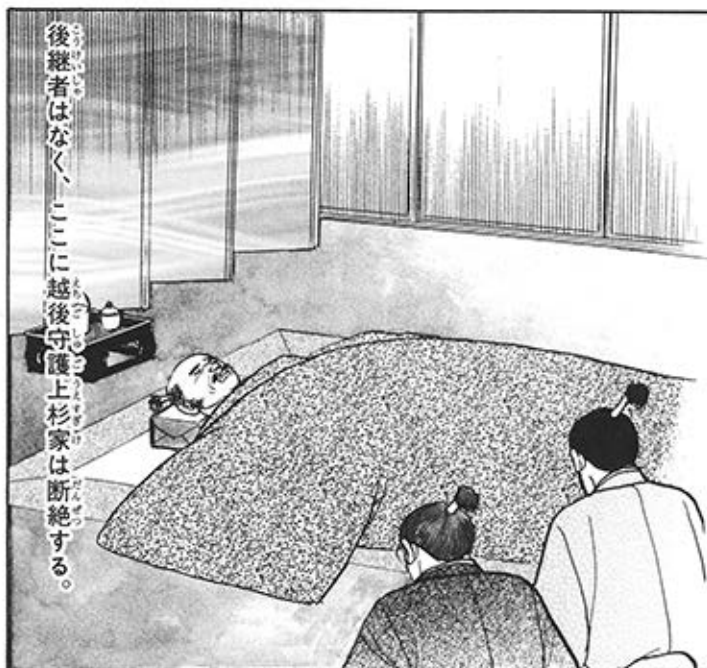


天文十九年、

越後守護、上杉定実が死去。

国主の座にありながら、戦乱の世に振り回され、傀儡守護に甘んじ続けた失意の一生が終わった。

後継者はなく、ここに越後守護上杉家は断絶する。



定実死去の二日後、

景虎は、朝廷から白傘袋と毛氈の鞍覆の使用を許され、実質的に国主大名の待遇となる。



※傀儡守護：陰の人物に操られ利用されている形だけの守護。

長尾政景

よもや
晴景様が
国主の座を
追われよう
とは……

政景の妻、
仙桃院

このまま
春日山城に
参勤なされない
おつもりですか

今の殿にとって
わしは反逆者
も同然
今更

おめおめと
顔を出せる
訳がない

景虎は
わたくしの
実の弟

きちんと
詫言を入れ
さえすれば

心の優しい
あの子のこと
きつと
許して
くれます

晴景に味方して分が悪いことに加え
景虎の母の実家、栖吉長尾家の勢力が拡大していた
ことも政景には我慢がならなかった。

ならぬ！

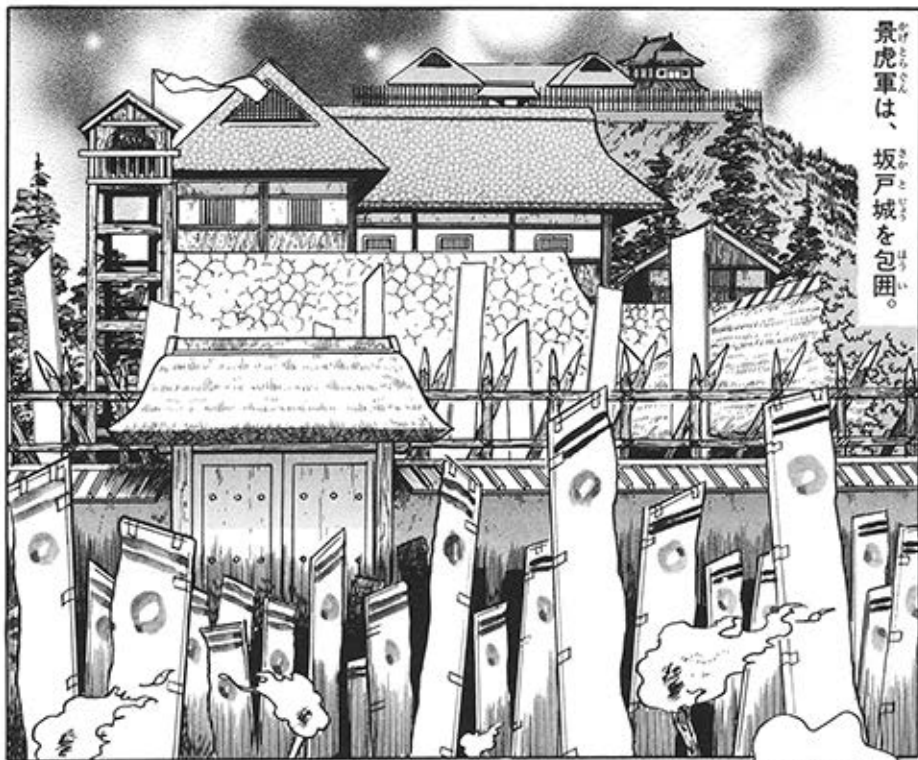
一度
晴景様に
忠誠を誓った
この身
そう易々と
寝返るなど
武士の恥じや！



琵琶島城主、
宇佐美定満



景虎軍は、坂戸城を包囲。



このままだと
城は
落ちます！

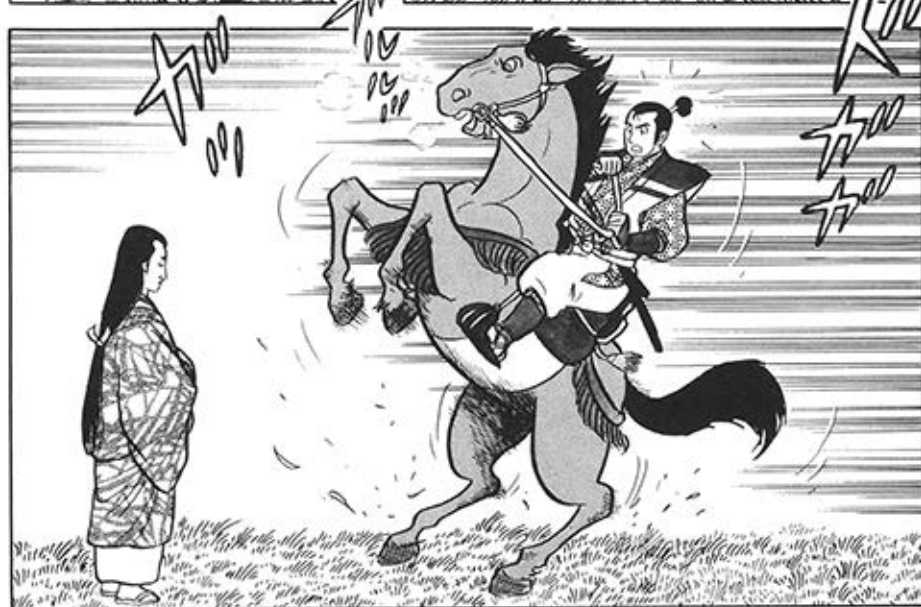
和睦を！



景虎の怒りが
本気であることを
悟った政景側は
誓詞を送り、
和平を申し出る。

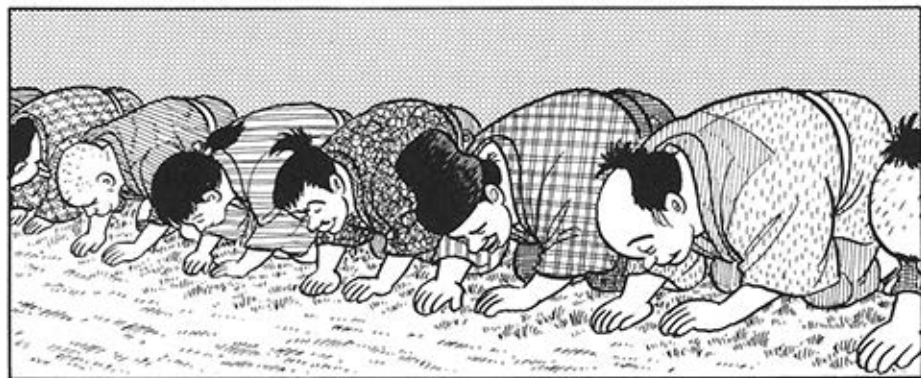


しかし景虎は
許そうとしなかった。









政景を臣下としたことで、
長尾一族内の反目を
完全に除去した景虎は、
名実ともに越後国主と
しての地位を確立した。



第 2 章

関東管領への道 ～宿敵武田信玄の登場～



関東管領
上杉憲政

春日山は
まだか……

まもなくに
ございます
お屋形様

しっかり
なされて
下さい

憲政殿が
こちらへ？

まことか！

着の身
着のままで
北条氏康
率いる軍勢
から

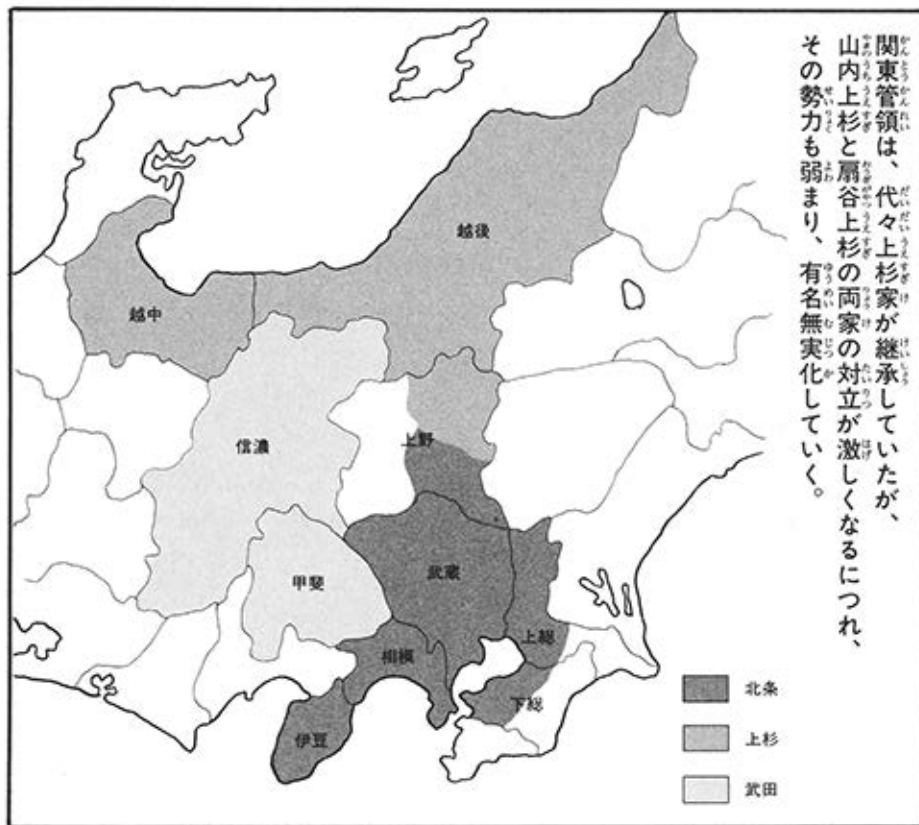
逃げ延びた
ご様子

北条氏康
……

※関東管領：室町幕府の職名であり、鎌倉府の長官の補佐役。代々上杉氏がその職についていた。



関東管領は、代々上杉家が継承していたが、山内上杉と扇谷上杉の両家の対立が激しくなるにつれ、その勢力も弱まり、有名無実化していく。



そこへメキメキと頭角を現した相模の小田原城主、北条氏康が力の弱まった上杉勢を駆逐、関東の実質的支配者となっていた。



軍神
毘沙門天様

われ
の
突
き
進
む
道
を
導
き
た
ま
え
……

形骸化し、実権の伴わない関東管領とはいえ、
名を重んじ、義侠心に富む景虎は憲政の申し出を
受け入れ、関東攻略を決意する。

やはり……
やらねば
ならぬか！

景虎は府中（府内）に館を築造し、
憲政の住いとした。

御館と呼ばれたこの場所は、二十六年後、謙信の二人の養子、
景勝と景虎が家督相続を争った「御館の乱」の
舞台として有名になる。

※府中：春日山城下町。





そなたとは
実の兄弟で
ありながら
いがみ合っ
てばかりだ
った……

それはもう
過去のこと

わたしが今
こうして
越後を守っ
ていけるの
も亡き父と
兄上のた
ゆまね御
努力があ
ったから
こそです



所詮わしは
人の上に
立つような
器ではな
かったのだ

そなたを
間近に見
るとそれ
がよく分
かる

兄弟とし
てこのよ
うにも
つと語
りおう
てみた
か

そうす
れば……

兄上ッ！



長子に生まれながら、才に恵まれず
戦乱の隅に追いやられてしまった
不遇の武将の最期だった。

この頃、名だたる戦国のスター達が
頭角を現し始めていた。

北条氏康

今川義元

織田信長

関東の覇者、北条氏康、
駿河の雄、今川義元、
尾張の革命児、織田信長。

そして謙信の宿命のライバル、
甲斐の名将、武田信玄。

歴史に名高い川中島の合戦と共に、
いよいよ謙信は
戦国の表舞台へと登場する。

申し上げます

信濃の
村上義清殿が
武田晴信（信玄）
の軍勢に攻められ

葛尾城を
追われた
との由

なにッ！

葛尾城主、
村上義清

高梨殿も
井上殿も
須田殿も

信濃の豪族は

ことごとく
武田勢に打ち
破られる始末

このままでは
信濃は武田に
滅ぼされて
しまう

まったく
面目無い！

武田晴信
……

恐ろしく戦術に
長けた奴と
聞いてはいたが
信濃を侵略した
となると
ここ越後も穏やか
でなくなる

景虎殿

このまま
武田の
傍若無人を
絶対許す
わけにはいかん

どうか力を
貸して下さい！

ご憂慮
なさるな

この景虎が必ずや
武田から領地を
奪い返して見せ
ます！

天文二十二年（一五五三）六月、
破竹の勢いで進撃する武田勢に追われた信濃衆、
村上義清、高梨政頼らに助けを求められた景虎は
川中島に進出し、晴信に戦いを挑む...

ありがたい！

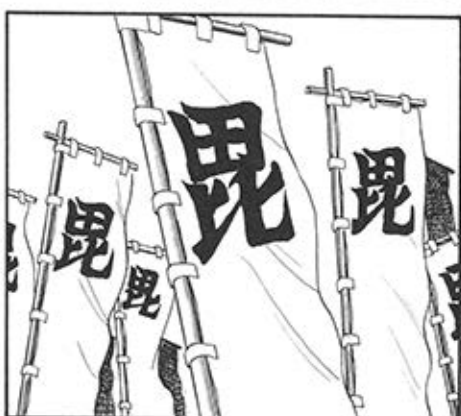
越後の
景虎が？

武田晴信

武田家臣、
山本勘助

村上義清に
救いの手を
差し伸べ！
信濃に向け
挙兵の由





川中島は善光寺平（長野盆地）を流れる千曲川と犀川が交わる三角州である。ここを攻略し、越後への足掛かりとしたい晴信側に対し、越後から上洛を望む景虎にとって、善光寺平は生命線であり、何としても死守せねばならなかった。



二度ほど激突したが、決着がつくまでには至らず、両軍ともほとんど兵を引き、第一回川中島の合戦はほぼ互角に終わる。



二度ほど激突したが、決着がつくまでには至らず、両軍ともほとんど兵を引き、第一回川中島の合戦はほぼ互角に終わる。



恐るべし
武田軍団

あやつらに
勝つのは
並大抵な事
ではないぞ……

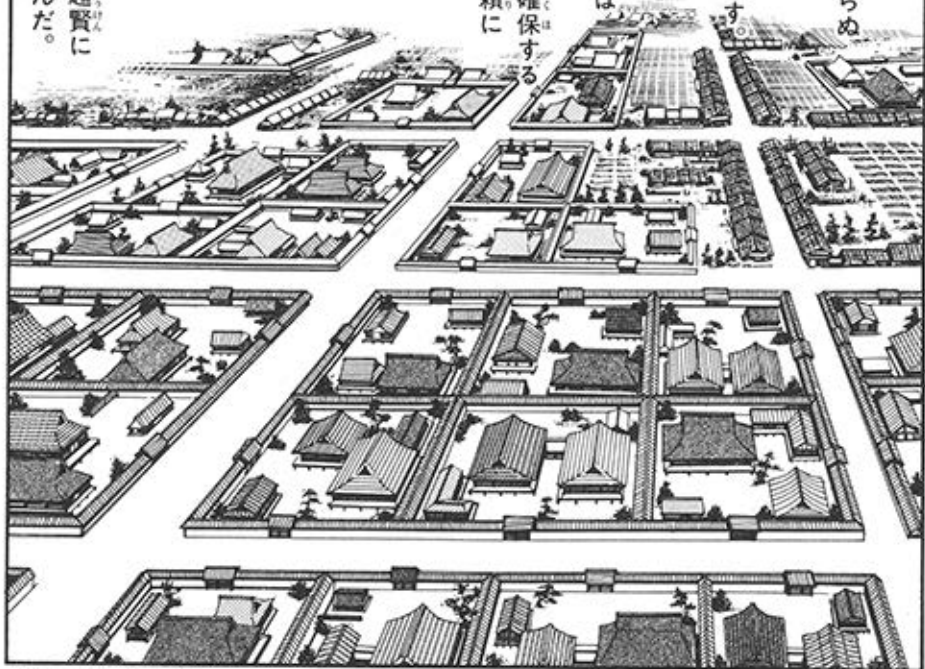


勝利を急ぐにはあまりにも
危険すぎる相手と察知し、
牽制し合ったのは間違いない。
この川中島での戦いはその後
十二年にも及び計五回戦わ
れている。

武田との一戦冷めやらぬ
同年九月、
景虎はかねてからの
夢だった上洛を果たす。

戦乱の最中、
敵地を横断することは
大きな危険が伴う。
景虎は上洛の安全を確保す
るため、近江の六角定頼に
太刀と鷹を
越前の朝倉宗満に
大鷹と鳥屋を贈り、
懇親を深めた。

越前、加賀、能登の
一向宗徒対策には
信濃国御坊本誓寺の超賢に
通行安全の折衝を頼んだ。



※上洛：京の都へ上ること。

精銳二千を率い、海路と陸路に分かれて京を目指した。



景虎は郷津港から船に乗り、能登を回って越前三国港に上陸、陸路の兵と合流し上洛した。

上洛には莫大な資金がかかる。景虎のこの大遠征と朝廷などへの献金を可能にしたのは、越後の金銀山と青苧だった。特に青苧は越後の特産品で畿内や西国で盛んに流通していた。青苧は苧という野性植物で、この繊維で織ったのが越後上布である。木綿が普及していなかった戦国時代、一般庶民の衣料として重宝されていた。

府中や柏崎の港から京へ苧船が出ており、この流通経路の確立が、景虎の上洛をスムーズに実現させた。





京都の豪族、三好長慶が
景虎に恥をかかせようと
仕掛けた罠だった。



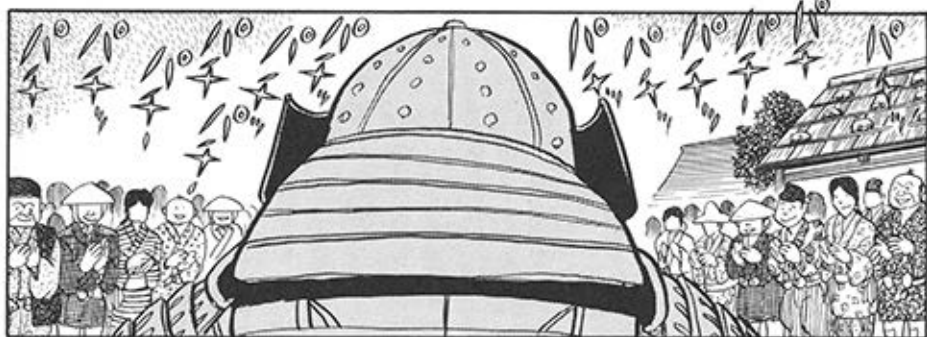
男に凄まじい
形相で睨まれた
途端…



大猿は、
おとなしく
なったのだ。



その時、
屈強な男が大猿の前に
立ちはだかった。



見事な
処置じゃ
彌太郎

褒めて
つかわす

はっ



男の名前は小島彌太郎。
景虎の側近として

数々の手柄を立て、
その勇猛果敢さから

鬼小島の名で

周りから恐れられていた。

前もってこの策謀を

察知した景虎側は、

密かにこの猿に接近し、

手なずけていたという……。

おどろ

おどろ



京都御所



景虎は後奈良天皇に拝謁。

天璽と御剣を賜り、戦乱鎮定の綸旨を頂戴する。

これを景虎は、北条・武田を討伐せよとの命令と

解釈し、名利過分の幸せといたく感激した。



※綸旨：天皇からいただいた命令。

※名利過分：身に余る栄誉。

足利義輝

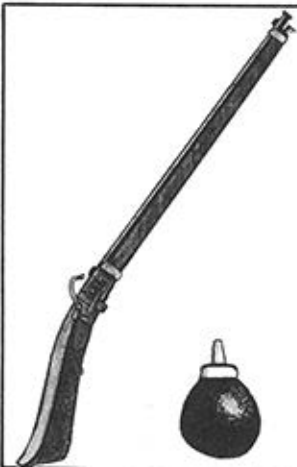


続いて景虎は
將軍足利義輝との
謁見を希望したが、
義輝は三好長慶によつて
近江へ追いやられていた
ため、謁見には次の上洛
まで待たねばなら
なかった。

この頃、室町幕府の權威は地に墜ち
都は三好長慶や松永久秀たちが
専横の限りをつくしていた。



公式行事の後、景虎は堺に立ち寄り
鉄砲や玉薬（火薬）を購入。



更に大坂の本願寺・紀伊の高野山
京都の大徳寺に参詣した。



大徳寺は臨済宗大徳寺派の総本山で
一休和尚の寺として名高い。

十二月八日、

景虎は、名僧として評判の高い
前住持第九十一世徹叡宗九から
三帰五戒と法号宗心を
受けた。

精力的にスゲジュールをこなした
景虎は同年暮れ、ようやく
帰国の途についた。



翌天文二十三年（一五五四）五月、
武田信玄は、北条氏康、今川義元と三国同盟
を取り結ぶ。

武田信玄

北条氏康

今川義元

これにより背後の脅威がなくなった信玄は
いよいよ信濃制覇に本腰を入れはじめる。



※三帰五戒：三帰は、仏・法・僧に帰依すること。五戒は、人として守るべき5つのいましめ。

武田家臣、甘利昌忠

もしこちらと
手を結んで
下さるのなら

あなたを
武田の重臣
として手厚く
迎えるつもり
です

しかし……
景虎殿を
裏切るわけ
には

北条城主、北条高広



代々
長尾家に仕え

親族同然である
あなたを

最近の景虎殿
は軽んじている
ように見受け
ますが



晴信は景虎勢の
不満分子、
北条高広に目を付け、
謀反をそそのかす。

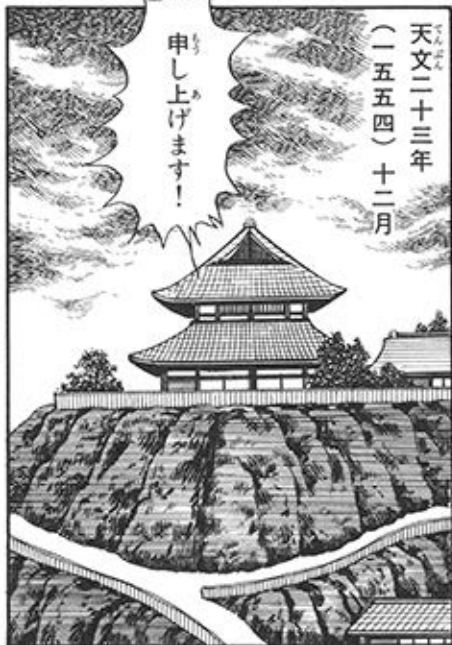
……

我が主君
晴信様が
あなたの力を
見込んで
お頼み申し
ておるのですぞ！



天文二十三年
(一五五四)十二月

申し上げます！



与板城主、
直江実綱

北条城、
謀反の由



なんだとッ！



景虎の動きは素早かった。

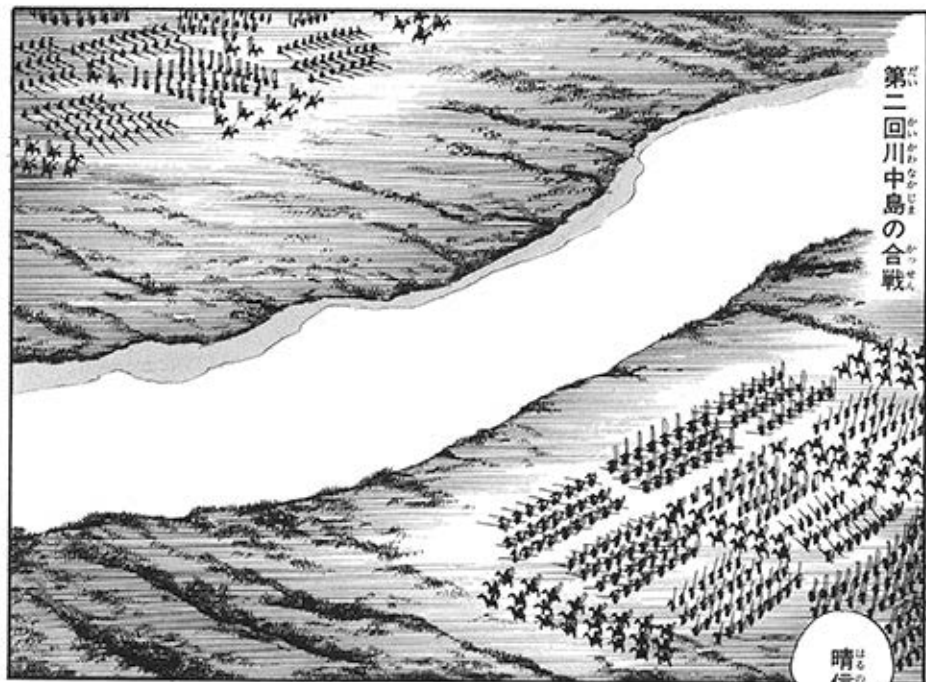
翌弘治元年一月、
北条城攻撃の前線基地となる上条城と琵琶島城に
援兵を派遣し、二月初めには自ら兵を率い、北条城を
包囲した。







第二回 中島の合戦



晴信め

しびれを切らすような睨み合いが三月続いた。

こちらの
失策を待つ
つもりだな
そうは
いかぬ!

短気なお前が
じっとしておる
のは

拷問にも勝る
苦しみのはず
じゃ

動け、
動かぬか
景虎





晴信もまた同様だった。



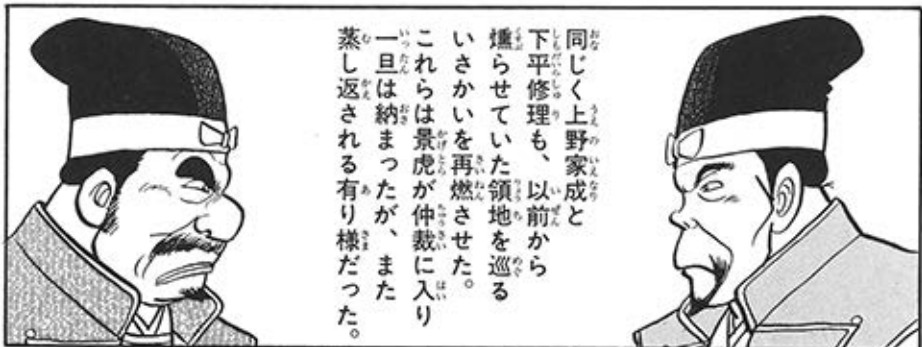
同年十月、
長陣に疲れ果てた
信玄側がついに今川義元に
調停を依頼。

景虎もそれに応じ
「互いに他領を侵略しない」
という条件でようやく
和睦が成立する。



景虎に心休まる時はなかった。

武田との戦いを終え帰国すると
今度は国内の内紛が待ち構えていた。











※段銭方：財政担当。



八月、
隠退を翻した景虎は電光石火の攻撃で
朝秀軍を討伐。



大熊朝秀は甲斐に逃げ落ち、
武田の家臣となった。

信濃・葛山城

弘治三年（一五五七）二月、
武田勢は葛山城を
攻め落とす。



これに激怒した景虎は
信濃に出撃。



同年八月、
第三回川中島の合戦。
しかし、これも決戦には至らず
互角のまま兵を引く。



永祿二年（一五五九）四月、

景虎は將軍義輝に請われ、
五千の大兵を率い、二回目の上洛を果たす。
この頃、景虎の勇名は広く轟いており、
まさに得意の絶頂にあった。

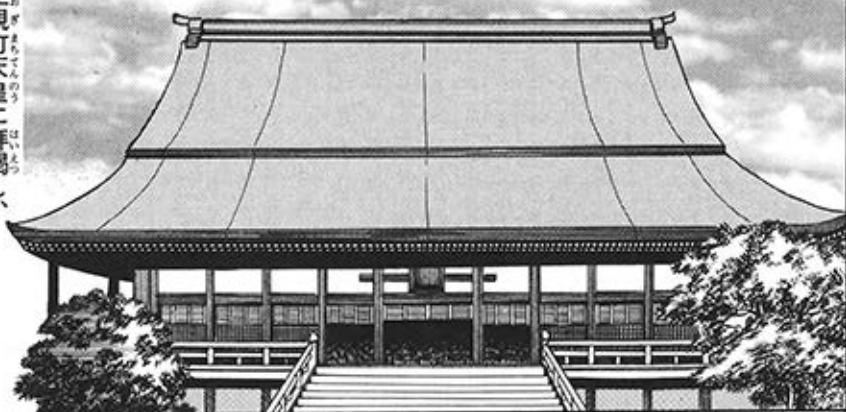




景虎の威風に恐れを
なした京の支配者、
三好長慶と
松永久秀は
わざわざ出迎えに来て
必死に景虎の機嫌を
取り結んだという。



景虎は正親町天皇に拝謁し、
先帝のときと同様の天盃と御剣を賜った。



そして前回果たせなかった將軍
足利義輝にもようやく拝謁する
ことが出来た。



関東管領
上杉憲政の
進退については

そなたの
馳走に
任せる

これは事実上、
景虎の関東管領への
任命を意味した。



※馳走：世話をしたり面倒をみたりすること。

野望や権力を追い求めた戦国武将の中にあつて、
謙信だけは本気で朝廷と室町幕府の再興を望んだ、
稀に見る信義にあつい武将であつたという。

身に余る光栄に
ございます

この景虎
將軍家ご再興の
ためならば

たとえ越後を
失つても忠節を
尽くす覚悟です

たよりに
しておるぞ

義輝は関東管領にふさわしい特別の
資格を景虎に与えた。



文の裏書、塗興、菊桐の紋章、朱柄の傘、屋形号の
使用許可がそれで、先年の白傘袋と毛氈の鞍覆の使用
と併せて世にこれを上杉の七免許と呼んでいる。
文の裏書と塗興は、三管領の一族と同格のものであり、
この待遇から、義輝がいかに景虎に大きな期待をかけて
いたかが窺い知れる。

さらに
火薬の作り方を
詳細に記した秘伝書を授け、
関東の平和回復と
將軍家再興の夢を
若き謙信に託した。



※三管領：室町幕府の管領に任ぜられる格式を持つ、斯波・細川・畠山の三家。





景虎は京の公家達とも熱心に交流を持った。中でも関白、近衛前嗣とは親しく交わった。

京にはもう
未練はござらん

わたしはそなたの
所へ行きたいと
思っておるのです

ひとつ
考えては
下さらぬか
景虎殿

関白殿の
望みとあらば
景虎

どのような
頼みも引き受
ける所存です

公家といえどもその地位は幕府ともども失墜しており、
関白の地位にいる前嗣でさえも別天地を求めるほど
当時の京は荒れていた。

このとき、景虎は前嗣と越後下向の誓詞を取り交わし約束するほど、二人は固い友情で結ばれていた。後に近衛前嗣は本当に越後に下向し、景虎から丁寧なもてなしを受けている。

ところで…

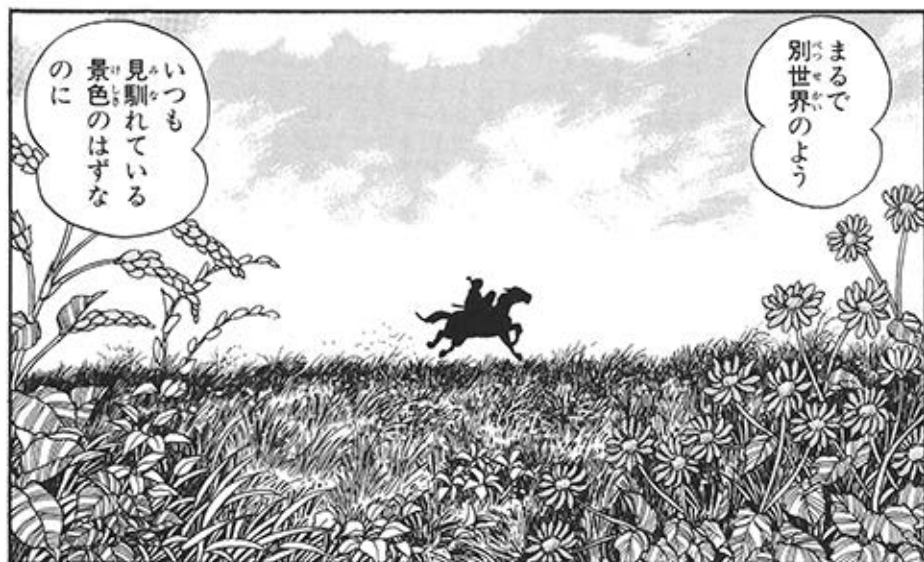
景虎殿が
和歌や琵琶の
才に優れたこと
を話した所

是非お目に
かかりたいと
申す者がおる
のですよ

それは
光榮の
いたり

こちらへ
通しなさい











永禄三年（一五六〇）三月、
越中松倉城主、椎名康胤から、かねてから対立する
富山城主、神保良春が武田と内通と知らされ、
富山城を討伐。



景虎は、上洛・天下統一への足掛かりとなる
越中出陣を果たす。



意気揚々と凱旋帰国した景虎に、
憲政は関東出陣を働きかけた。

今の景虎殿の
勢いなら

関東制覇は
夢ではない！

いつかは自ら
出陣せねばと
考えておりま
した

今こそ
絶好の好機じゃ

北条を打ち
わしに代わって

関東を平定
して欲しい

そなたなら
出来る！

.....

折しも常陸の佐竹氏や安房の
里見氏など関東の反北条派から
出陣の要請が相次いでいた。

機は
熟したり
.....

待っておれよ
北条氏康ッ！

同年八月、関東管領上杉憲政の入国に供奉するといふ名目で、景虎は精銳八千余騎を率いてみずから初めて三國峠を越える。

この時から景虎の関東出陣は実に十三回にも及び、うち八回は出征先で越年という壮大な遠征となった。



まず沼田城を攻め、



厩橋城に入り、



ここを本拠に破竹の勢いで関東平野を席巻し、北条方諸城を攻略した。

年が明けると、景虎の対北条戦への参陣呼びかけに続々と関東諸将が大軍を率いて集まった。



※供奉：行列の共をすること。

※席巻：次々と攻め落すこと。



第 3 章

決 戦 川 中 島



我が
毘沙門天
の化身なり！
よいか
皆の者！

死なんと
戦えば生き
生きんと戦えば
必ず死する！
死を恐れるな！
毘沙門天が
ここに
ついておる！

その数十万とも
十一万とも
報告されて
おります！

長尾景虎の
軍勢さまじい
勢いで城を
攻めたてて
おります！

案ずるな

北条氏康

しよせん向こうは
急ごしらえの
戦陣

ここはじつと
我慢して城を
守りぬくのじゃ！

そうすれば
敵は必ず
退く

百戦錬磨の武將、
氏康の老獪な籠城作戦
は当たり、小田原城は
景虎の猛攻にも屈せず、
容易に陥落しなかつた。

やるのう
氏康

さすがは
難攻不落の
堅城とうたわ
れるだけの
ことはある



鬼 鬼 鬼 越 鬼 始 鬼

包囲戦は一か月半にわたった。
その間、越中の一向一揆の策動や武田の信濃進出などの
知らせが入り、これ以上の長陣は不利と判断した景虎は、
北条に自分の脅威を存分に示したところで小田原城攻略
を断念。兵をまとめて鎌倉に引き上げた。

鎌倉・鶴岡八幡宮

永祿四年（一五六二）

閏三月十六日

景虎は生涯最良の
晴れの日を迎える。



景虎は上杉憲政に望まれ、
関東管領職に就任。
併せて山内土杉家を相続した。



憲政の一字を賜り政虎と改名。
ここに関東管領・
上杉政虎が誕生する。
ときに政虎三十二歳であった。

関八州成敗の権を得、その存在を東国中に知らしめた政虎は、同時に己の使命を全うすべく、北条との泥沼の戦いにますます引きずりこまれる結果となる。



事実、政虎が帰国すると、北条勢はすぐに勢いを取り戻し、再び関東を掌握。政虎をいきりたてた。

関東管領、
上杉政虎とな？

馬鹿馬鹿しい

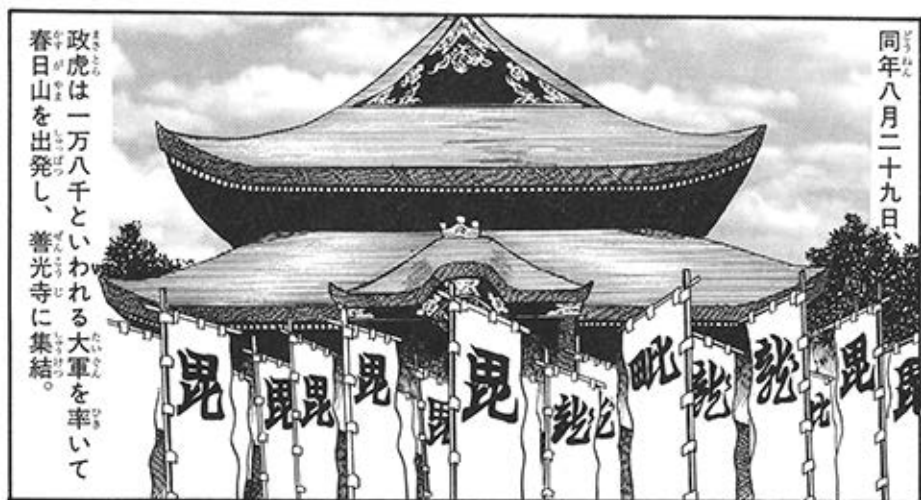
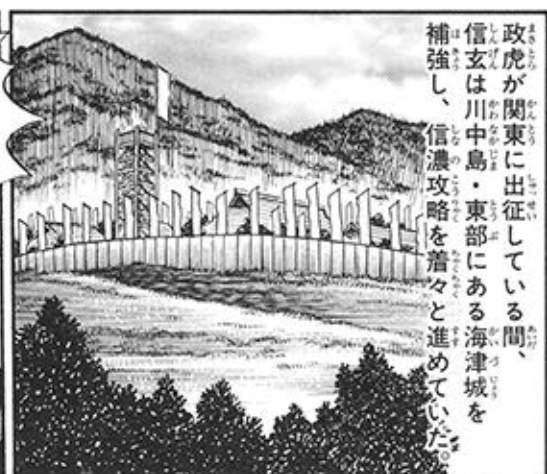
二年前、仏門に入った晴信は「信玄」を名乗るようになっていた。

北条・武田討伐の大義名分を得てますます一途にその正義感を燃やしている様子

わしは腹の膨れる実を取る

役にもたたん
名や地位なんぞより

相も
変わらぬ
青臭い
理想主義者
よのう



政虎は、大荷駄と後詰（後方部隊）として五千の兵を善光寺に残し、自らは一万三千の兵と小荷駄を率い、妻女山に陣を張る。

毘



刀八毘沙門

龍

政虎の軍旗は「毘」「龍」「日の丸」。

毘は政虎が熱烈に信仰する

毘沙門天の一字をとったもの。

龍は「懸り乱れ龍」の旗と称された。

日の丸の軍旗は「天賜の御旗」と称され、

父、為景が朝廷から下賜されたものである。

疾如風 徐如林 侵掠如火 不動如山

信玄の旗は孫子の兵法書からとった「風林火山」。
（疾きこと風の如く、徐かなること林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如し）

政虎奇襲の狼煙を受けた信玄は、八月十八日、一万七千の兵を率いて甲府を出発。二十九日、海津城に入城する。

歴史に名高い川中島の合戦は、この第四回の戦いを指す。



※大荷駄：馬で運ばれる大型の荷物。

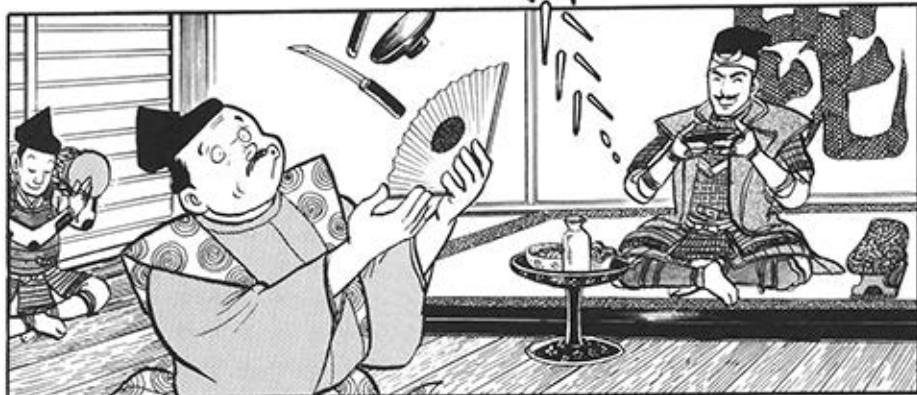
政虎が妻女山に着陣して半月近くが経ったが、動く気配はなかった。

何を

考えておる
政虎の奴

物見の報告に
よりますと

毎夜酒を飲み
琵琶を弾き
鼓を打って
騒いでいる
そうです



勤け信玄

お前が
いつになく
焦っておるのは
わかってる

殿はどうなさる
おつもりなのか
このままでは
兵糧もつきて
しまうぞ

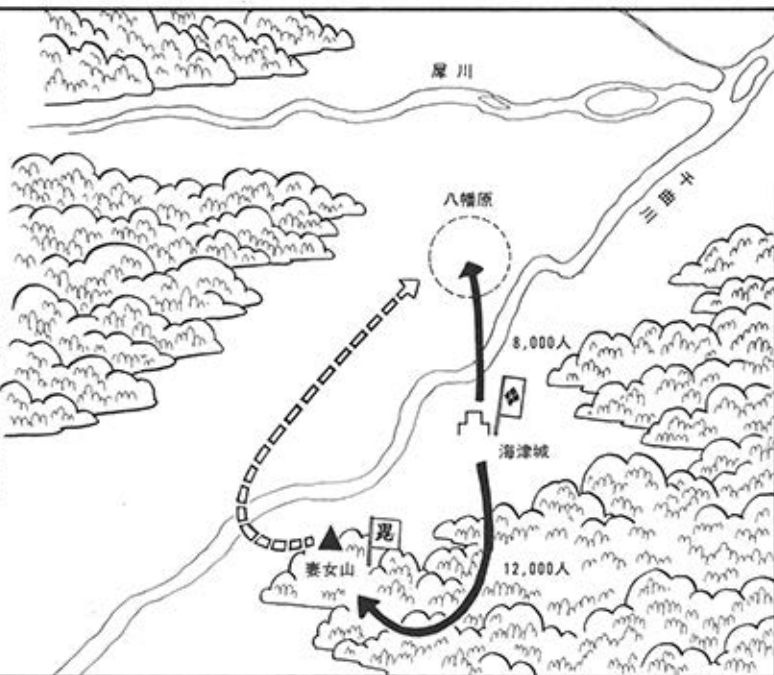
いや
殿のことだ
きつと何か
深いお考えが
あつてのことに
違いない

今
しばらく
待とう





武田軍は、一万二千の別動隊を妻女山背後から奇襲させ、上杉軍が八幡原まで追われたところを待ち伏せした八千の本隊で全滅させる作戦に出る。



とうとう
動いたか
信玄！



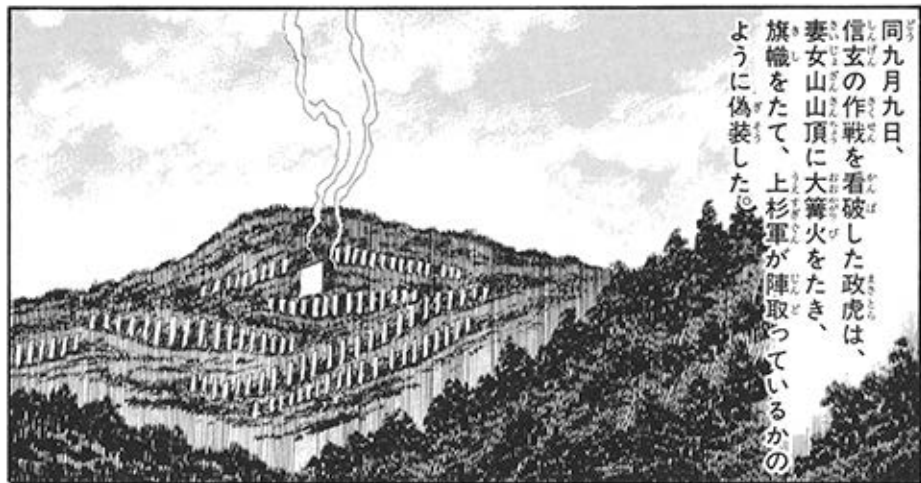
確かに！



いつもより
炊煙が多く
上がっており



同九月九日、
信玄の作戦を看破した政虎は、
妻女山山頂に大篝火をたき、
旗幟をたて、上杉軍が陣取っているかの
ように偽装した。



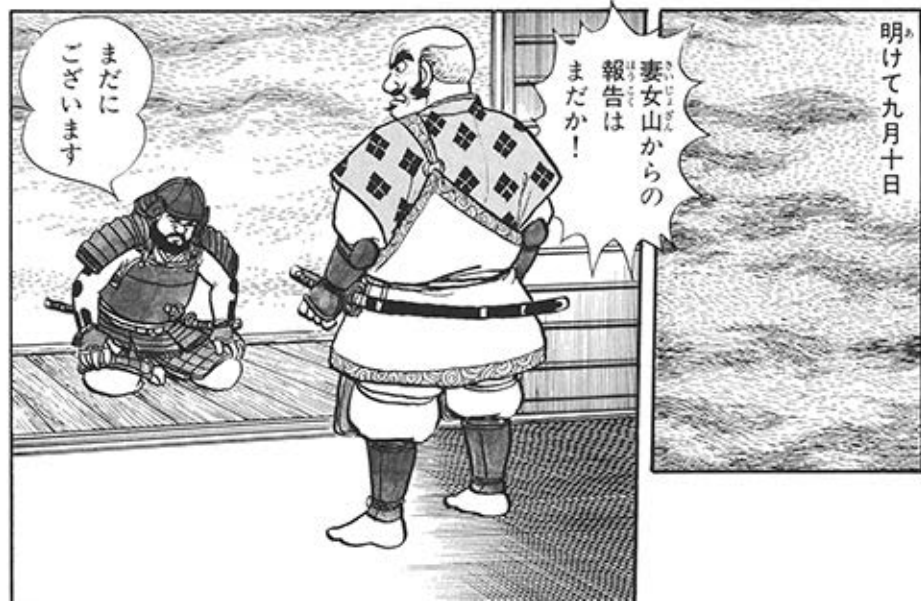
亥の刻（午後十時）を待つて、
妻女山を下り、千曲川を渡り、
八幡原へと兵を進めた。

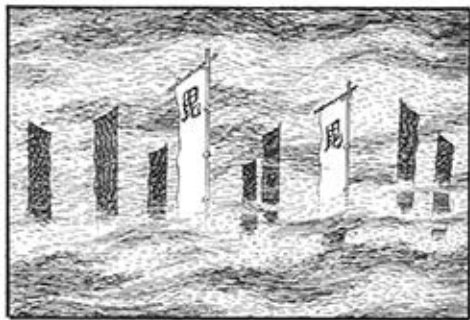


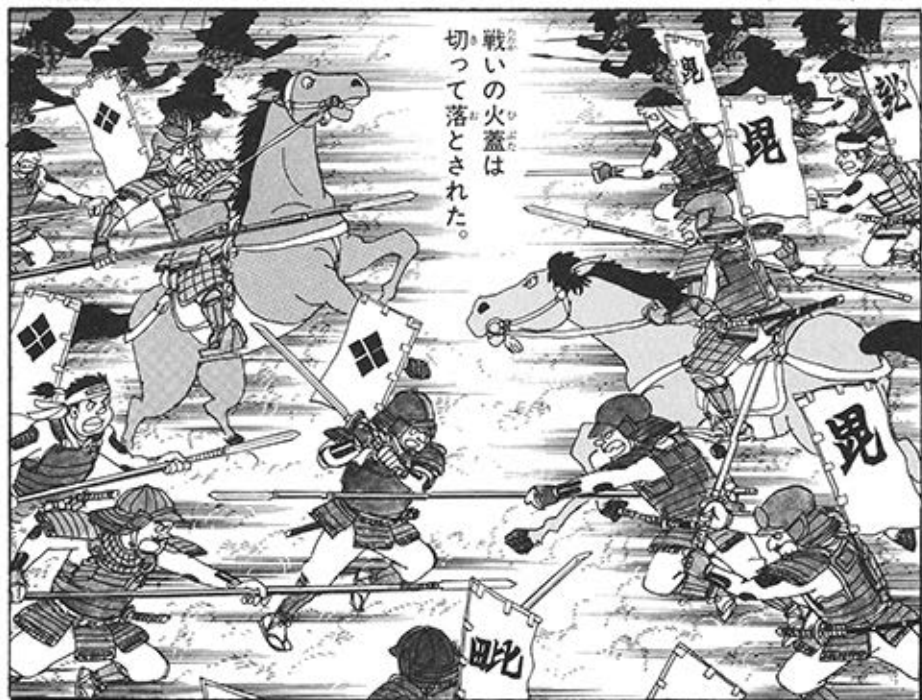
明けて九月十日

妻女山からの
報告は
まだか！

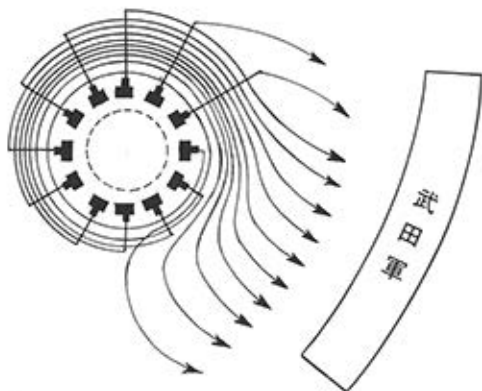
まだに
ございます







この一戦に上杉家の興亡を賭けた政虎は「車懸りの陣法」という、本陣を中心にぐるぐる車輪のように回りながら次々と敵に突入する攻撃戦法を用いる。



壮絶な
白兵戦が
続いた。

一方、信玄は「鶴翼の陣法」という、鶴が翼を広げるように横に広がった包囲戦法で応戦した。

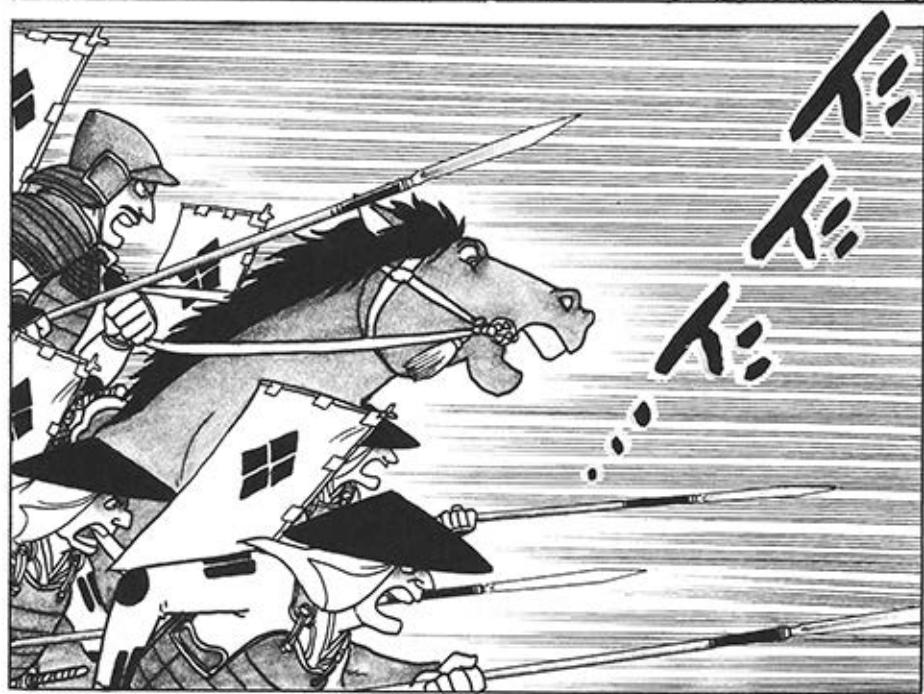
武田軍

妻女山から
もうすぐ
味方がまいる

それまで
何が何でも
しのぐのじゃッ!



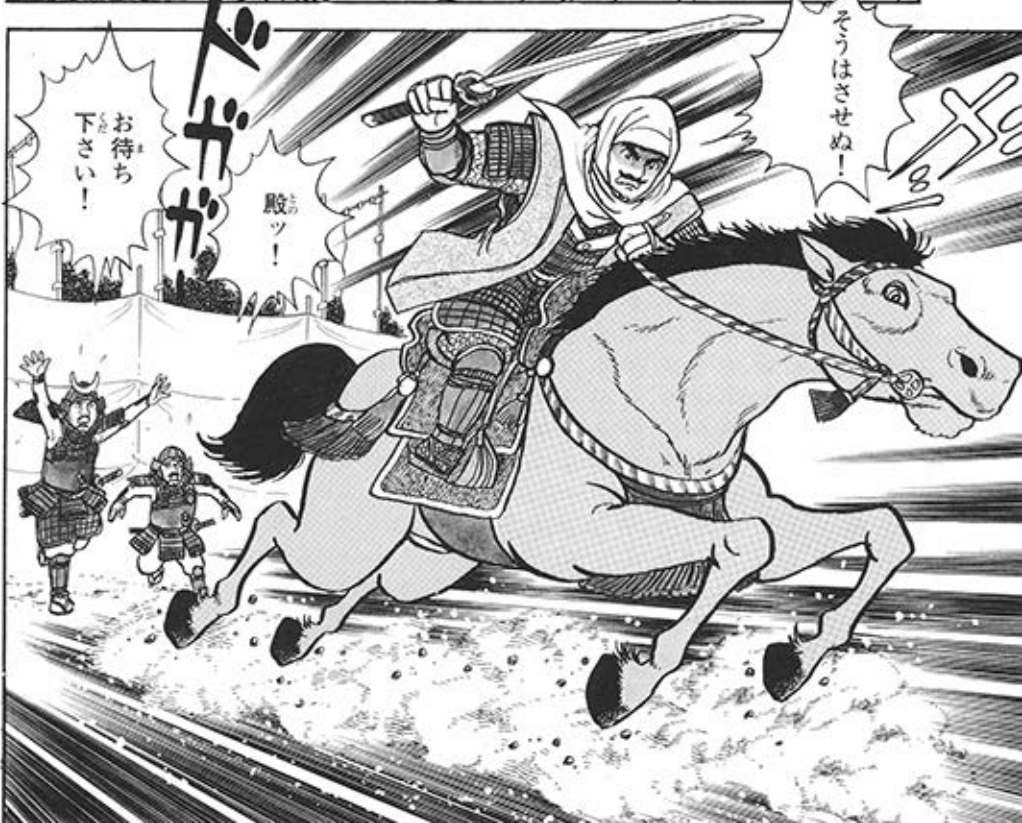
※ 白兵戦：両軍が入り乱れて戦うこと。

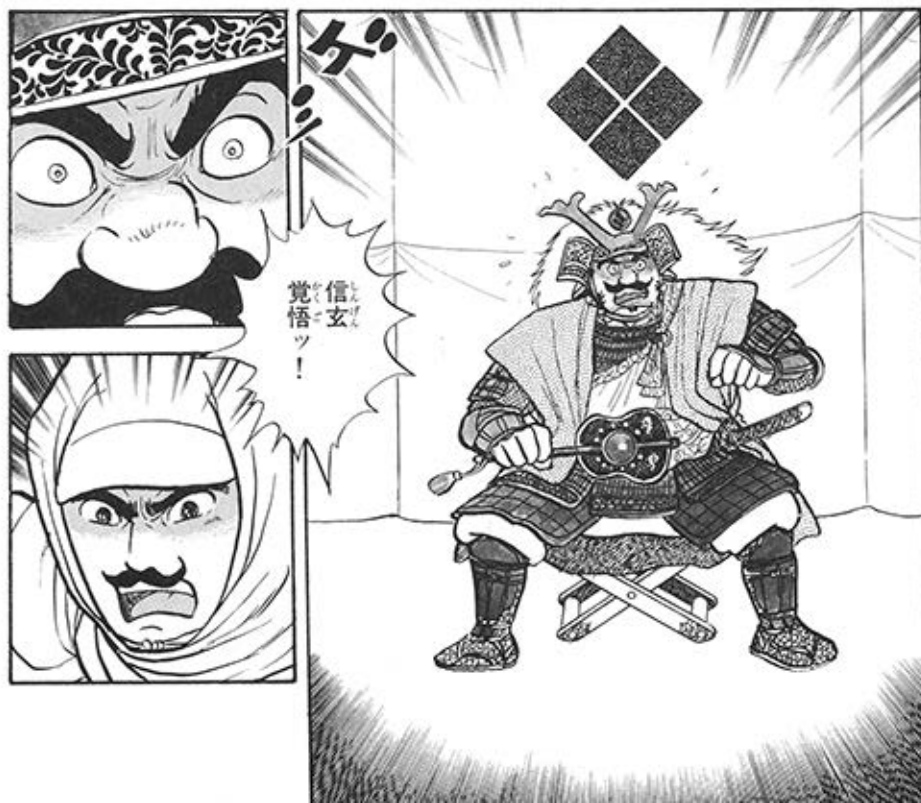


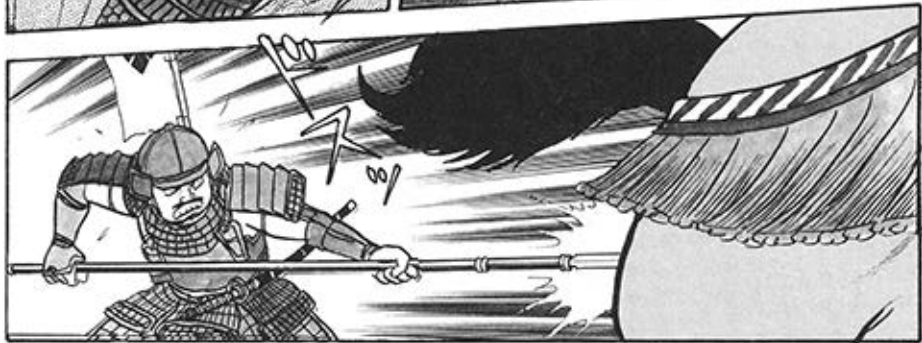


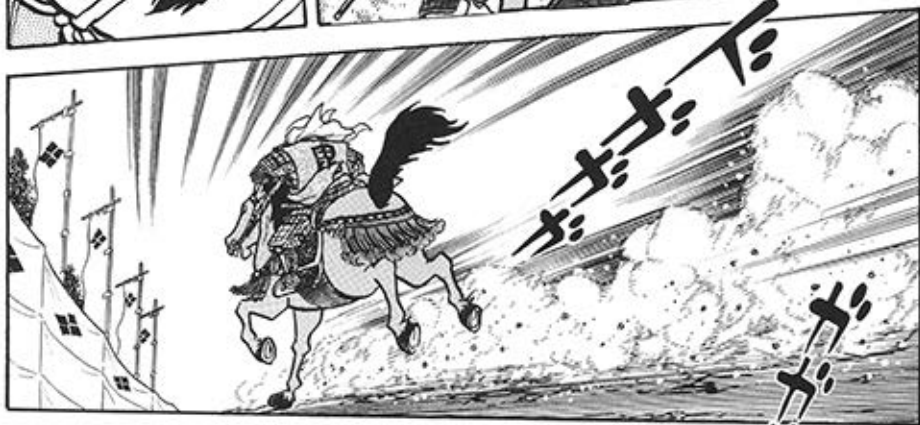






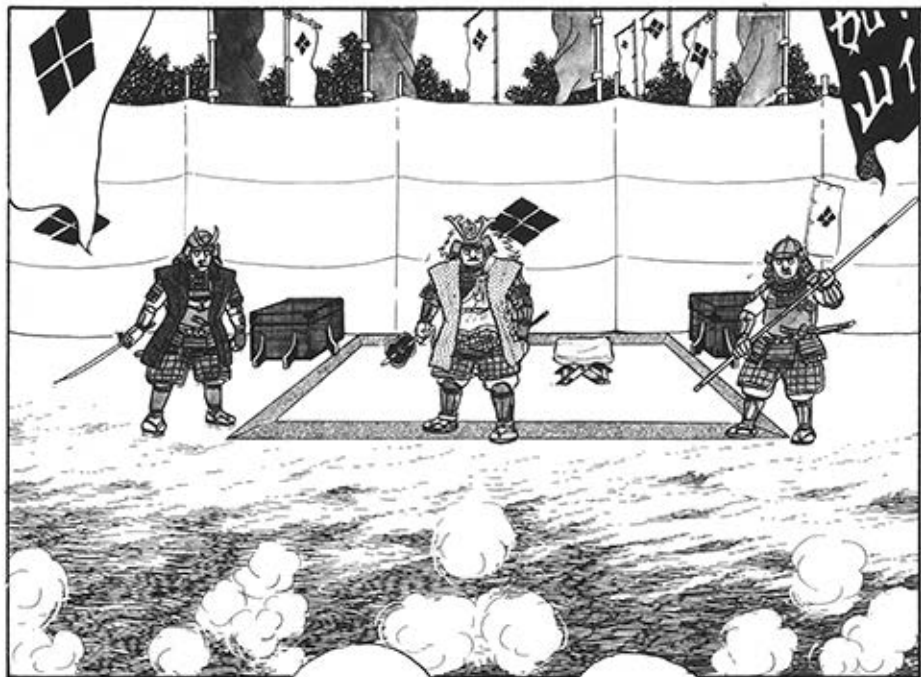






しかし
信玄の
震える様を
この目でしかと
見届けたぞ!

無念!



武田軍別動隊の到着により戦況は二転。
政虎はこれ以上の戦闘続行は不利と判断。
全軍を善光寺平に退却させる。
武田に追撃する余力はなく。
川中島第四戦はここに終結する。
両軍合わせ八千余人の死者が出る。
史上稀にみる大激戦であった。
武田側は信玄の弟の信繁、山本勘助、
諸角昌清、初鹿野忠次など大將
クラスを失い、大きな痛手を被った。
この勝負、「甲陽軍鑑」は
「卯の刻（午前六時）から始まった前半は
上杉軍の勝利、巳の刻（午前十時）頃から
の後半は武田軍の勝利」と
判定している。



川中島での決戦冷めやらぬ
同年十一月、



北条は武田に応じ、
武蔵松山城を攻撃する。



政虎は休む間もなく関東に進撃、
北条・武田とのあくなき戦いに日々を費やし
上野厩橋城で越年する。

この年十二月、
將軍足利義輝の一字を賜り、
名を上杉輝虎と改める。



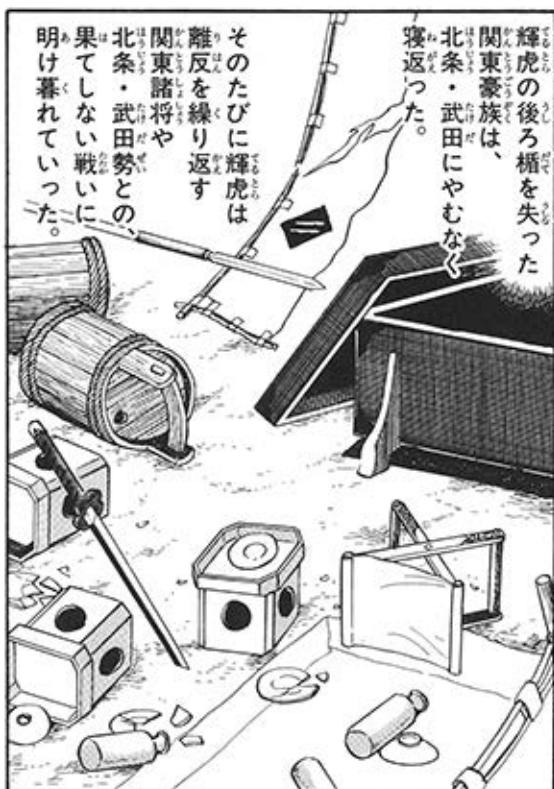


この後関東管領の責務を果たすべく輝虎は何年も関東に出陣し続けた。





雪国・越後の軍勢は農兵を主体とし、秋の収穫後に越山、冬を関東で越し、春には撤収せざるをえない宿命を持っていた。



輝虎の後ろ楯を失った
関東豪族は、
北条・武田にやむなく
寝返った。

そのたびに輝虎は
離反を繰り返す

関東諸将や

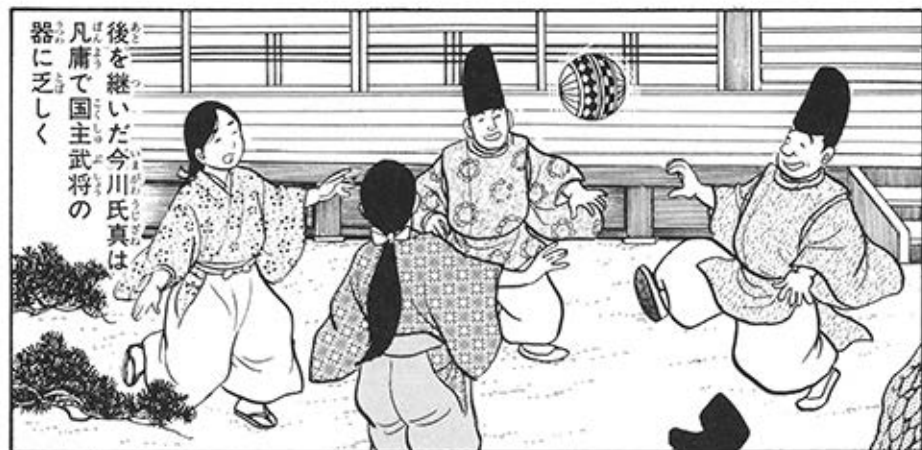
北条・武田勢との、

果てしない戦いに
明け暮れていた。



信長ら有力大名が
兵農分離を進めるなか、この上杉の
軍事体制は、大きな弱点と
いえた。





ここに長年輝虎の関東進出を妨げてきた
甲・相・駿の和(三國同盟)が崩れ、関東における
勢力関係に変化の兆しが見えた。



甲斐への
塩送りを全て
止めるのじゃッ!

今川の呼びかけに
北条も応じ、
甲斐への塩を絶った。
国境を山で囲まれ、
塩を生産できぬ甲斐
にとって、これは大打撃
だった。



おのれ
信玄!

目に物
見せて
くれる!





塩留めとなり？

はい

武田への
報復措置に
ござりましょう

今川・北条から
越後もこれに
協力願いたい
との旨、申し出
がありました





領民は深く輝虎の高義を感じ、
その厚志を徳としたという。
俗に言う「敵に塩を送る」はこれを語源にしている。



その後、甲斐の国に越後の塩商人が領民に
塩を売る姿があったという。



第 4 章

関東平定、そして上洛への夢



駿河を徳川家康と一緒に攻め、西へ西へと心を馳せていた信玄は、輝虎を牽制するため、この越中に目を付ける。



これに激怒した輝虎は直ちに越中へ進撃。椎名の居城、松倉城を攻めた。

永禄十一年（一五六八）三月、越中輝虎方の椎名康胤が信玄に寝返り反逆。一向一揆と組んで越後をおびやかした始めた。



越中へ釘付けとなった輝虎に信玄の謀略が更に襲いかかる。

本庄繁長

謀反の由にございます

なに！



輝虎軍の有力武将、本庄繁長が居城

本庄城に立て籠もって挙兵。

信玄の手は輝虎の最も頼りとするところの将まで及び越後に激しい揺さぶりをかけた。

輝虎は急遽越後に引き返し、同年十一月、本庄城を包囲する。



打倒上杉を掲げる越後の国人衆は誰もおらんのか！

本庄繁長

輝虎に不満を持つ豪族を集め、自分の味方につけようとした繁長だったが、その目論見は外れ、誰も賛同する者はいなかった。



自分の方につけようとしたが、その目論見は外れ、誰も賛同する者はいなかった。



※国人衆：領主や地侍など

武田に
援軍を
頼むのじゃ！

しかし信玄も
駿河に侵攻していたため
繁長を見放した。

翌永禄十二年（一五六九）三月、
苦しい籠城戦を続けた繁長は
輝虎に屈伏。

奥州武將の仲介もあり、
繁長の子息頼長を人質とすることを
条件に許す。

毘

信玄め
よほど上洛
したいと
見える

越中の
一向宗徒のみ
ならず

わしが
頼りとする
本庄までも唆し
上杉を叩こうと
躍起になって
おる

げに
恐ろしき
執念じゃ



この頃、織田信長が
足利義昭を奉じ
先の上洛してしまったため、
信玄は猛烈に焦っていた。



北条が
我が国との
和睦を伺って
おりますが

いまだ
関東平定も
ままならず

武田・今川・
北条の
三国同盟も
武田の駿河
攻めで破れた

この辺で
北条と結び
武田と共に攻める
のが得策かも
しれぬのう



元亀元年（一五七〇）三月、
輝虎は北条氏康と
和睦し、氏康の七男を
養子に貰う。

そなた、年は
いくつじや

十七に
ございます

わしを本当の
父と思ひ
頼りにするが
よい

ありがたき
幸せに
ございます

輝虎は自分の幼名
「景虎」を授ける。
更に義兄である
長尾政景の娘を妻に
娶らせ、実の子同様に慈しんだ。

北条氏康は輝虎のとつた待遇に感謝し
「御城中において御祝儀をとげられるの由、
誠に千秋万歳の至、愚老において本望
満足これに過ぎず候」と
礼状を送っている。

同年十二月、
越中平定の祈願文を
納めた輝虎は、これより
法号謙信を称す。



翌年、
北条氏康が病に臥し、
越相同盟に暗雲
たなびく。



わしはもう
駄目だ



そのような
弱気な
ことを

北条氏政



よい
氏政

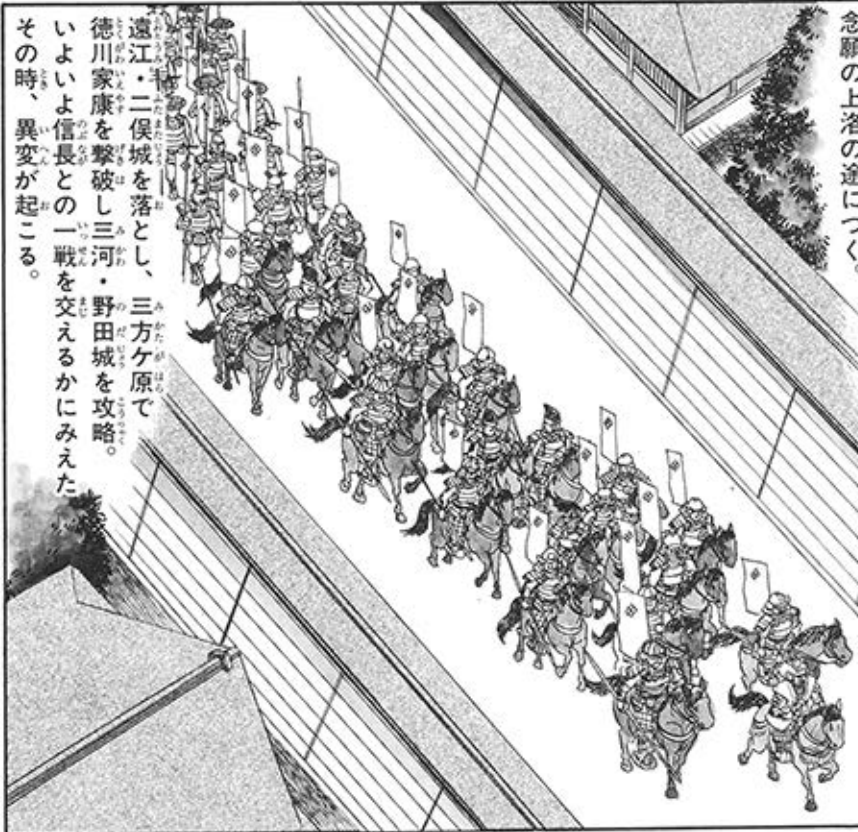
信玄、信長は
信用出来ないが
謙信には裏表
がない

謙信こそ
頼るに値する
信義の将だと
いうことを忘れ
るでない





一方、信玄は元龜三年（一五七二）十月、
念願の上洛の途につく。



遠江・二俣城を落とし、三方ヶ原で
徳川家康を撃破し三河・野田城を攻略。
いよいよ信長との一戦を交えるかにみえた
その時、異変が起こる。

信濃・駒場



病魔に冒された信玄は
急遽帰陣する。



父上!



甲斐を守りぬけ





カラッ



信玄殿が
お亡くなりな
りました



信玄が……

死んだとな



信じられぬ

わしを苦しめ
憎んでも
憎みきれぬ
あの怨敵

信玄が
死んだ……

宿敵とはいえ
殿と双璧を
なすほどの
名将であら
れました



なぜ
死んだ！

わしとそなた
の戦いはまだ
終わってはい
ないぞ！

信玄ッ！

さぞかし
無念であつた
ろう……

信玄の計報に接し、
謙信はハラハラと落涙し、
その死を惜しんだという。

七月、
信玄の死で勢力衰えた越中武將、椎名・
神保は謙信によって討伐される。



八月、
越中を平定した上杉勢は勢いに乗り
越中・加賀国境の朝日山城まで攻め
て行く。



籠城した一向一揆勢は雨あられのごとく鉄砲を乱射し、上杉軍を苦しめた。



これほどの鉄砲戦で来るとは思わなんだ

迂闊であつた



吉江与次（景泰）十六才



あの
若武者
は？

吉江景資
が子
与次に
ございます



武勇と無謀
をはき違えて
おる



ここで
無駄死に
させては
親に申し訳が
たたぬ

捕らえて
どこぞに
閉じ込めて
おけ

はっ

朝日山城は上杉勢の猛攻に必死に抵抗し、
和睦に持ち込む。



天正二年（一五七四）三月、
織田信長から「洛中洛外図屏風」が贈られる。

見事な
屏風じゃ

まばゆい
ばかりで
ござる





天正三年（一五七五）一月



景勝

これより
ますます
精進致します！

謙信には景虎の他に
もう一人の養子
喜平次・顕景（姉、仙桃院
と長尾政景の子）がいた。
この時期、
顕景に「加冠」し、
景勝を名乗らせていた。

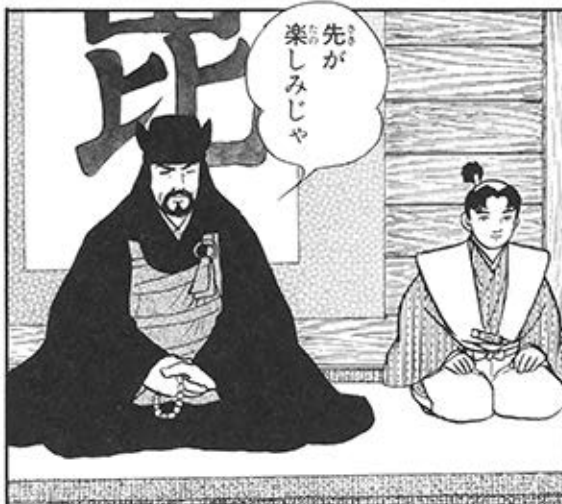


直江兼統

兼統はその聡明
さを買われ
若くして謙信に
仕えていた。
のちにこの景勝
の忠実な家臣
となる。



先が
楽しみじゃ



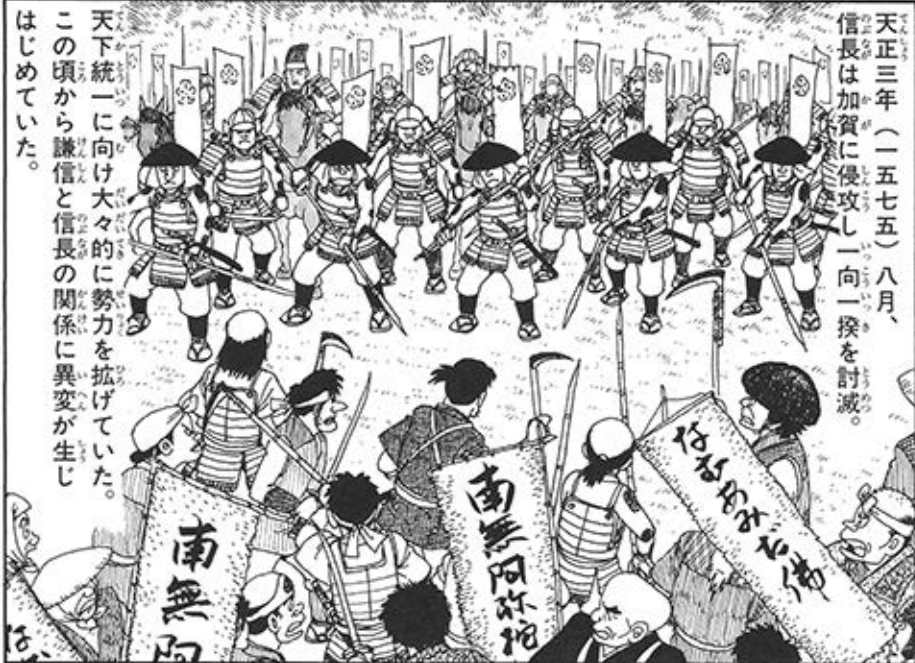
謙信はこの二人を
分け隔てなく
可愛がった。

しかし、その事が
謙信の死後、
家督を巡る二人の骨肉
の争いへと発展すること
になる……。



※加冠：男子が成人となり、初めて冠をつけること。

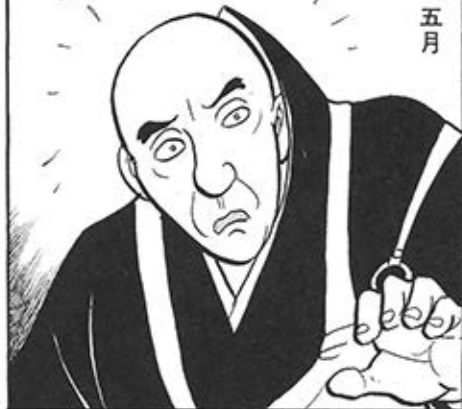
天正三年（一五七五）八月、
信長は加賀に侵攻し一向一揆を討滅。



天下統一に向け大々的に勢力を拡げていた。
この頃から謙信と信長の関係に異変が生じ
はじめていた。

天正四年（一五七六）五月

追い詰められた
一向一揆の総本山、
本願寺の顕如は、
信長に唯一対抗し
うる人物として謙信に
救いの手を求める。



顕如と手を組んだ
謙信は、宿敵
一向宗徒との歴史的
和解を成立させる
と同時に信長との
対立が決定的な
ものとなる。



天正五年（一五七七）九月
一向宗徒を味方につけた謙信は、
越中・能登の大部分を平定。



更に和睦に応じず信長方についた七尾城主、
畠山氏を攻める。
激戦の末、謙信は七尾城を攻略。

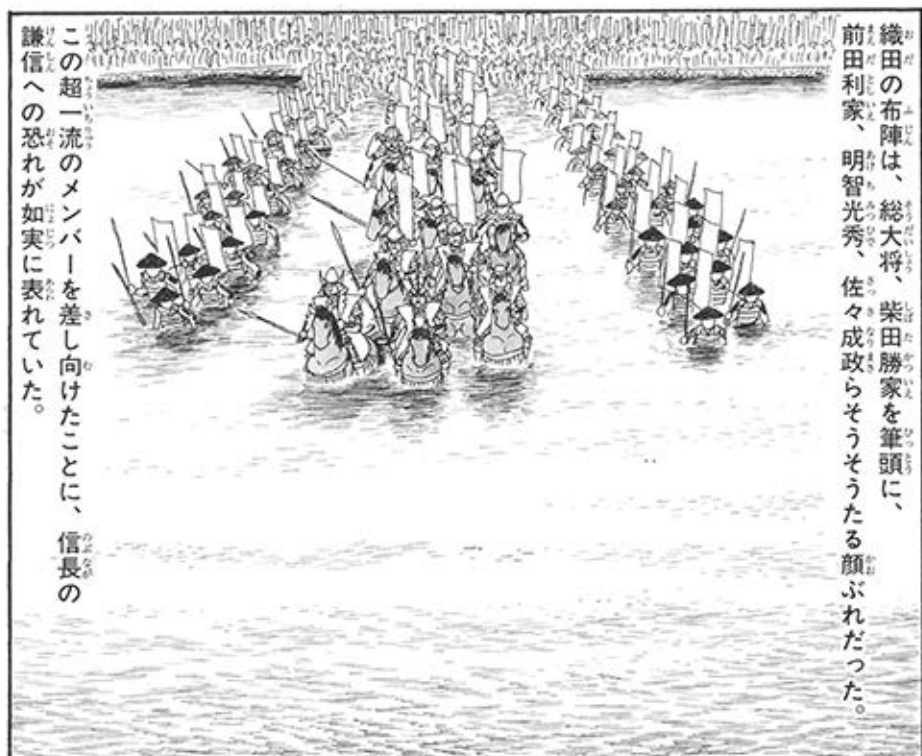
織田が
手取川に
侵攻とな!

その数、およそ
四万八千余り
とのことす

七尾城を救うため、織田が大軍を従え、
能登に陣を置く上杉勢に迫る。

……
とうとう
来たか





柴田勝家

上杉謙信！

おのれがもはや
老いぼれに
過ぎないことを
この織田軍勢
が教えてやろ
うぞッ！



申し上げ
ます！

七尾城が
上杉に攻め落と
された由



なにッ！



今だ！
かかれッ！

上杉の恐ろしさを
織田に思い知らせる
のじゃーッ



難攻不落の名城、七尾城の陥落を途中で知った織田勢は
途端に士気を低下させ退却を始めた。



謙信の鋭い攻撃に加え、手取川の増水で逃げ場を失った織田軍は大敗を喫し、上杉軍の大勝利で戦いは終わる。



「信長と雌雄を決する覚悟で臨んだが、この分なら天下統一も容易である」謙信にそう豪語させるほど、この勝利の手応えは大きかった。

あれが天下の織田の軍勢とは信じられぬ

田比

何と意気地のない奴らじゃ



関東平定を視野に入れていた謙信は深追いをしなかった。この時、もし追撃していたら、歴史は大きく塗り替えられていたかも知れない。

「上杉に逢ふては織田も名取川（手取川）はねる謙信逃るとぶ長（信長）」
この戦いの様子を後世の人々はこう狂歌に詠み、謙信の強さを讃えた。





見事な
月じゃ

今宵は
中秋の名月
でござる

織田の大軍を破った後、謙信は七尾城に戻り、諸将らと酒宴を催した。



霜は軍営に満ちて秋気清し
数行の過雁月三更
越山併せ得たり能州の景
さもあらばあれ家郷の遠征
をおもふは

このときの故郷の越後を想う
謙信の心境を、後の頼山陽が
吟じた有名な漢詩である。



同年十二月、
能登から帰国した謙信は、上杉軍団八十一名の
動員名簿「上杉家家中名字尽手本」
を作成する。



中心は越後武將で、越中・能登・加賀・上野の
武將も含まれていた。
この軍勢で一致団結して上洛することを謙信は
構想していたに違いない。

明けて天正六年
(一五七八)正月
三月十五日
関東に出陣
する！



みみら



氏康、信玄
なき今こそ
永年の悲願たる
関東完全平定
の好機！



その後、再び
京へ上り
信長を討つ！
そして
天下に号令を
かけてみせる！



殿！

その一言を
お待ち致し
ておりまし
たぞ！



殿！





天正六年（一五七八）三月十三日、
未刻（午後二時）上杉謙信 逝去。
享年四十九。



上洛への見果てぬ夢を抱きつつ、静かに逝く。
辞世の詩は

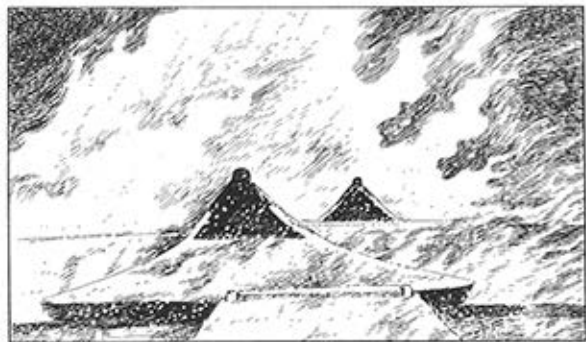
「四十九年一睡夢、一期栄華一盃酒」
四十九年のわが生涯は、振り返れば一睡の夢にすぎなかった。
この世の栄華は一盃の美味しい酒に等しい。



戦国最強の武将とうたわれながら、私心を捨て、義のために
乱世を戦いぬいた、類まれなる英雄の死だった。

第一義

林泉寺に今も残る謙信自筆の大額「第一義」は、武将にして禅僧である謙信が、苦悩しながらも戦う意義をことんまで突き詰めた彼の清廉かつ高潔な精神そのものである。



謙信亡き後、上杉家は景勝、景虎の二人の養子間で家督相続争いがあつた。御館の乱である。戦いを制したのは謙信の血を引く景勝であつた。

景勝は戦乱の時代を巧みに切り抜け、秀吉の天下においては大老の重責を担った。



豊臣に味方した景勝は徳川の時代、米沢国替の身となったが、上杉家は長く栄え、後に名君の誉れ高い上杉鷹山を生んでいる。

かつてしのぎを削り合った武田、北条が減じ、上杉家が安泰だったのは、謙信の尊い理想、崇高な精神が子孫へと受け継がれた結果に相違ない。



兵乱夢に見ず、謙信が生前、春日山城の看経所に奉納した願文のこの言葉に、彼が心から平和の世を望んでいたことが分かる。謙信の祈りは天に届いたのである。

主な登場人物



辞世の詩

四十九年一睡夢

一期栄華一盃酒

— 四十九年のわが生涯は、振り返ってみれば一睡の夢に過ぎなかった。

— この世の栄華は一盃の美味しい酒に等しい —



◆謙信画像（上杉神社蔵）



◆上杉輝虎（謙信）花押

上杉謙信の足跡



(写真提供: 米沢市)

■上杉家廟所【米沢市】

米沢藩主上杉家歴代の御廟所。上杉景勝^{でいお}逝去の際に廟所とされて以来、12代斉定までの歴代藩主の霊が祀られている。米沢城解体の際に、謙信のなきがらは廟所中央に移葬された。



(写真提供: 鶴岡八幡宮)

■鎌倉鶴岡八幡宮【鎌倉市】

永禄4年(1561)閏3月、謙信は上杉憲政の頼みで山内上杉家を相続し、関東管領職に就任した。主家の関東管領上杉家を相続した謙信は、憲政の一字を賜って名前を「政虎」と改めた。

名城「春日山城」にあつて、関東・北陸に覇を唱えた「越後の名将・上杉謙信」。
甲斐の武田信玄との五度にもわたる川中島の戦いのほか、関東への出陣や京都への上洛などを行い、天下平定のために力を尽くした。義に厚く、人を尊び、越後に謙信ありとその名は全国に知れわたっていた。
謙信は、義のために戦乱の世を疾風のごとく駆けぬけ、四十九年の生涯を閉じた。



■春日山城【上越市】

享禄3年(1530)、春日山城で誕生。19歳で春日山城主となり越後を平定。

春日山城を拠点とし、関東・北陸・信濃へと兵を進めた。天正6年(1578)49歳で死去。



■林泉寺【上越市】

長尾氏の菩提寺。謙信が7歳から14歳の間、名僧天室光育のもとで、禅の修行と文武の道を学んだ。



手取川の戦い
(1577年)

七尾城

魚津城

富山城

川中島の合戦
(1561年)



■京都上洛【京都市】

生涯2度の上洛をしているが、初上洛は天文22年(1553)、24歳の時だった。2度目の永禄2年(1559)の時は、將軍足利義輝に「たとえ越後を失っても、將軍のために忠節を尽くします」と誓った。



(写真提供：長野市)

■川中島【長野市】

上杉謙信と武田信玄が戦った場所。この川中島の戦いは、天文22年(1553)から12年間で5回にわたって繰り返された。

■小田原城攻め【小田原市】

永禄4年(1561)に北条氏康の小田原城を攻撃した。1ヵ月半にわたる包圍戦を展開したが、堅城とうたわれた小田原城はついに攻略できなかった。

決戦！川中島の戦い



◆紀州本川中島合戦図屏風（和歌山県立博物館蔵）

戦国の両雄・越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が激突した川中島の決戦。

武田信玄の信濃侵略によって、村上義清を初めとする信濃の諸将は領地を奪われた。そこで彼らは、上杉謙信を頼り助けを求めたのである。これに応じて出陣したのが川中島の戦いの始まりであった。上杉謙信は、十二年間で五回にわたって出陣し、信玄と戦った。最大の激戦となった第四回川中島の戦いでは、謙信と信玄の一騎打ちがあったといわれている。その際、謙信は手柄のあった武將に、「合戦での忠功、政虎（謙信）は生涯忘れません。今後とも忠節を尽くしてください。」という感状を与えた。これは、合戦で大切な多くの武將を失ったことから「血染めの感状」と伝えられている。十二年間にも及んだこの戦いは、どちらも譲らず、結局決着はつかなかった。



◆軍配(上杉神社蔵)



◆紺地日の丸旗
(上杉神社蔵)

謙信の人柄

謙信の人柄を物語っているのが「名将言行録」という本にあり、「謙信は、勇敢、無欲、清浄、廉潔、明敏、器量広く、慈悲深く、少しも隠すところがない。戦国の世には、ありがたき名将である。」と記されている。

謙信は、義侠心、正義感に富んだ戦国時代屈指の名将であった。

天正二年（一五七四）に、織田信長は謙信との同盟関係を維持しようと、狩野永徳筆の「洛中洛外図屏風」を謙信に贈って機嫌をとっている。それほど謙信は一目置かれる存在であった。



上杉謙信銅像
（春日山城跡）





◆上杉謙信刻字(林泉寺山門の額／林泉寺蔵)



◆紙本金地著色洛中洛外図屏風(国宝／米沢市立上杉博物館蔵)

謙信の学問と信仰

幼少の頃、春日山城下の林泉寺に預けられた謙信は、天室光育のもとで厳しい禅の修行と文武の道を学んだ。謙信の強い精神は、教養と信仰によって養われてゆく。戦国大名となつてからも禅門に帰依し、四十五歳で剃髪して僧形となつてゐる。

自らを毘沙門天の化身と信じ、厚く信仰した謙信は、戦いするとき軍旗として毘沙門天を意味する「毘」の文字を書いた軍旗でのぞんだ。毘沙門天は、四天王の一つ、北方世界を守護する神であり、戦勝の神ともいわれている。

「龍」の旗は、懸り乱れ龍の旗といい総攻撃のときに本陣に掲げられた。この旗が掲げられると将兵は、勇気を奮い立たせ、生命を惜しまず戦った。このほかにも軍旗として「刀八毘沙門」、朝廷から賜った「日の丸」の軍旗があった。



◆毘旗(上杉神社蔵)



◆龍旗(上杉神社蔵)



◆毘沙門天像(滝寺町内会蔵)

五智国分寺◆
三重塔



謙信がもたらした産業の発達



◆青芋

謙信の軍事力や献金を可能にしたのは、越後特産の青芋（カラムシ）の茎の皮から取り出した繊維だった。

謙信は、青芋商人から「青芋役」（営業税）を、日本海沿岸の港に出入りする船から「船道前」（入港税）を徴収した。その関税が謙信にとって重要な財源であった。青芋の本所（青芋を「手」に取り扱ったところ）は、京都の三條西家であり、柏崎や府中の港から出荷された。

また、この繊維で織ったのが「越後上布」である。本綿が普及していなかった戦国時代、庶民の衣料として大切なものであった。このように、謙信は産業の振興に力を入れた。

現在、上越市は、海路と陸路双方の大動脈の結節点に位置しており、今も直江津港は、北海道と九州を結ぶ中継港として、また国際貿易港としても発展し続けている。



◆直江津港



◆直江津港

春日山城のしくみ

戦国時代には、戦国大名や土豪によって、戦や領地支配の拠点として山城が多く築かれている。山城は、見晴らしのきく山岳や台地などに自然の地形を生かして築かれた城であり、険しい山の地形が敵の侵入を防いでいた。

上杉謙信の居城「春日山城」も、前後を深い谷に囲まれた典型的な山城であった。城は本丸・二の丸・三の丸からなり、本丸の北方には毘沙門・護摩・諏訪の三堂が、山麓には謙信の館や直臣たちや一般家臣たちの屋敷等が並んでいた。

また、春日山城は、「春日」と「府内」からなる城下町を有していた。上杉氏は、それぞれの町のもつ機能を巧みに引き出し、謙信の養子景勝の時代には、北国随一の繁華な都市に発展したといわれている。



◆春日山城絵図(新潟県立図書館蔵)

謙信と出会う、
春日山めぐり



◆上杉謙信刻字(林泉寺山門の額／林泉寺蔵)

上越の英雄「上杉謙信」の
足跡を訪ねてみよう。
散策しながら楽しめる、
自然と歴史あふれる春日山。
現代の観光スポットとともに、
謙信について振り返ります。

春日山城跡周辺

春日山城跡

春日山城は、十四世紀中頃に築かれた標高百八十メートルの堅固な山城で、謙信の時代に完成した謙信の居城跡。

謙信は天文十七年（二五四八）、春日山城主になってから死去するまで



◆春日山城本丸跡



◆春日山城跡から高田平野、米山を望む

の三十年間、春日山城を根拠地に関東・北陸・信濃へと兵を進めた。現在、建物は残っていないが、城跡全体が国の指定史跡になっており、本丸跡から一望できる日本海、上越市街地、直江津港の眺望はすばらしい。今もなお、空堀や郭跡・大井戸などが残り、典型的な山城の姿をとめている。

大井戸

本丸跡近くにある井戸は、県下最大（直径約十メートル、深さ約十メートル）の大井戸である。山城の井戸としては日本最大で、どんな渇水でも涸れたことがなく、今も水が湧き続けている。



◆大井戸

毘沙門堂

謙信が出陣前に策を練った場所である。謙信は熱心な毘沙門天の信奉者で、戦いの前には必ず、毘沙門堂に籠もり戦勝を祈願していた。



◆毘沙門堂

春日山神社

春日山城跡の中腹に鎮座する春日山神社は、上杉謙信を祭神として、明治二十三年に旧高田藩士・小川澄晴（童話作家小川未明の父）が創建した。「春日山神社記念館」には、

謙信に関する資料などが展示されている。

神社の近くには「御屋敷跡」と呼ばれる平坦地があり、謙信が日常生活をおくった屋敷跡と見られている。また、川中島の方角を望む「上杉謙信銅像」もある。



◆毘沙門天像
(滝寺町内会蔵)



◆春日山神社

謙信公祭

大正十五年から上杉謙信の遺徳をしのんで、その霊を祀るため始められた謙信公祭。毎年八月十六日、十七日の二日間にあたり、春日山神社を中心に開催される。

ほら貝が鳴り、ときの声がひととき高く響き渡って「謙信公祭」の幕が開き、鎧・兜に身を固め、威儀を



◆武祿式

正した武将が勢ぞろいし、古式にのっとりて出陣の儀式である武祿式が行われる。

そして、出陣行列、火縄銃の演技、献納米合戦、凱旋式などがにぎやかに繰り広げられる。



◆鉄砲隊の実演



◆凱旋式

林泉寺周辺

林泉寺

室町時代中期に、越後守護代長尾能景（謙信の祖父）が父の菩提を弔うために創建した長尾氏の菩提寺。



◆林泉寺惣門

謙信が七歳から十四歳の間、名僧天室光育のもとで、禪の修行と文武の道を学んだ場所である。戦国の



◆宝物館

武将としては教養が高く信仰心が深いのは、この幼少時代に培われたものである。

茅ぶきの惣門は、春日山城の裏門を移築したもので、山門は鎌倉時代の様式を取り入れた大正十四年建立の名作である。境内には謙信の供養塔、川中島戦死者供養塔や宝物館、室町時代の様式の庭園などがあり、静かなたたずまいをより演出している。



◆上杉謙信公供養塔

春日山城史跡広場

春日山城の大きな特徴の一つに延長約二キロメートルの監物堀と呼ばれる堀がある。これは中世から近世への築城方法の変遷が分かる貴重な遺構といわれている。現在は、堀と土塁の一部が復元されていて、広場には春日山城の全体模型などがある。

「春日山城跡ものがたり館」には、上杉謙信や春日山城を知るためのビデオが放映され、展示室には春日山城の古絵図が年代を追ってパネル展示されている。また、本丸を望む展望室からは春日山城の大きさを体感することができる。



◆復元された堀と土塁



◆春日山城跡ものがたり館

上杉謙信略年譜

西暦

年号

年齢

年

譜

参考事項

一五三〇 享祿三

一歳

二月二十日 上杉謙信(幼名虎千代、初名景虎)、越後守護代長尾為景の末子として春日山城で誕生する。

一五三二 上杉憲政、関東管領となる。

一五三三 天文二

四歳

十月二十四日 上杉定憲方の長尾房長・中条藤資・新発田綱貞ら、居多神社を焼く。この日、為景、国内平定を居多神社に祈願し、平定後、社殿の再建を誓う。

一五三四 織田信長、誕生。

一五三六 天文五

七歳

春日山城下林泉寺に入り、天室光育に学ぶ。

一五三七 豊臣秀吉、誕生。

八月三日 為景、長尾家の家督を晴景に譲り、錦旗・重宝等を与える。父為景死亡説。

一五四二 天文十一

十三歳

十二月二十四日 父為景死去。謙信、甲冑を着て葬儀に参列する。

一五四二 徳川家康、誕生。

一五四三 天文十二

十四歳

九月二十日 日蓮宗本成寺に寺領を安堵す。ついで兄晴景に代わり中郡の長尾家領を統治するため栃尾城へ入る。

一五四三 ポルトガル船が種子島に漂着。鉄砲を伝える。

一五四五 天文十四

十六歳

十月十二日 謙信、兄晴景を援するため、栃尾城から春日山城にもどる。

一五四三 コペルニクスの地動説。

一五四八 天文十七

十九歳

十二月三十日 謙信、栃尾城から春日山城に入り、守護代長尾家を相続する。

一五四九 天文十八

二十歳

七月四日 関東管領上杉憲政、小田原城主北条氏康と戦い、謙信

※○で囲んだ月は閏月です。
※(一)の参考事項は海外の事項です。

一五五〇 天文十九 二十一歳

に救援を要請する。この日、謙信、平子孫太郎らに出陣の準備を命ず。
二月二十六日 越後守護上杉定実死去。嗣子がなく、越後上杉家断絶。

二月二十八日 十三代將軍足利義輝から白傘袋と毛氈の鞍覆の使用(国主大名の待遇)を許される。

十二月二十八日 長尾政景、謙信に反抗する。

一五五一 天文二十 二十二歳

八月二日 長尾政景討伐の陣触を出す。長尾政景、謙信に降伏する。
謙信、これを許す。

一五五二 天文二十一 二十三歳

一月十日 関東管領上杉憲政、小田原北条氏康に敗れ、この日、上野平井を脱し、謙信を頼る。謙信、御館を築造し、憲政を入れる。

五月二十六日 従五位下、彈正少弼に叙任。

一五五三 天文二十二 二十四歳

二月十日 前守護代長尾晴景、死去。

八月 村上義清・高梨政頼・井上清政・島津忠直・須田満親・善光寺別当栗田等、武田信玄に領地を奪われ、謙信に援を求める。謙信、川中島に出陣し、布施で武田軍と戦う。(第一回川中島の合戦)

九月 謙信、初めて上洛する。後奈良天皇に拝謁し、天盃と御剣を賜る。

十二月八日 前大德寺住持徹齋宗九から宗心の法名を授かる。

一五五五 弘治 元 二十六歳

二月三日 北条城主北条高広、武田信玄に内通し、謙信に背く。謙信自ら善根に出陣し、北条城を攻撃する。この日、謙信、安田景元の戦功を褒める。

一五四九 フランシス・コザビエル来日。キリスト教を伝える。
一五五〇 ポルトガル船が平戸に入港。

一五五四 武田、北条、今川の三国同盟。

西暦	年号	年齢	年譜	参考事項
一五五五	弘治元	二十六歳	七月十九日 信玄と川中島付近で戦う。(第二回川中島の合戦)	一五五五 織田信長、清洲城に移る。
			十二月二十七日 上杉景勝、誕生。	織島の戦い。毛利元就が陶晴賢を破る。
一五五六	弘治二	二十七歳	六月二十八日 出家の志を天室光育に告げ、高野山へ向かう。	
			八月十七日 関山権現で出家を断念する。	
			八月二十三日 箕冠城主大熊朝秀、信玄に内通して謙信に背く。	
			謙信、朝秀を駒返で破る。	
一五五七	弘治三	二十八歳	八月 信玄と信濃上野原で戦う。(第三回川中島の合戦)	(一五五八 エリザベス一世が即位／英国)
一五五九	永禄二	三十歳	四月二十一日 謙信、上洛する。(二回目)	
			五月二日 参内して正親町天皇に拝謁し、天盃と御剣を賜る。	
			六月十二日 謙信、足利義輝に条書を提出して忠節を誓う。	
			十月二十八日 謙信、京都から帰国。諸将、太刀を献じて祝賀する。	
一五六〇	永禄三	三十一歳	三月二十六日 椎名康胤と神保良春が対立する。謙信、両者を和解させる。良春、信玄に応じ越後に侵入しようとする。謙信、良春討伐のため、初めて越中に出陣する。	一五六〇 桶狭間の戦い。織田信長が、今川義元を破る。
			三月三十日 神保良春の越中富山城を攻撃する。良春、富山城を	

放棄して増山城に入る。謙信、増山城を攻撃する。良春、増山城をすてて逃亡する。謙信、越中の守備を厳重にし、帰国する。

五月 居多神社に制札を掲げる。

八月四日 安房の里見義堯、北条氏康と戦い謙信に救援を要請する。謙信、北条氏と戦うべく、初めて関東に出陣。厩橋城で越年。

三月 謙信、上杉憲政を奉じ、越後・関東の諸将を率いて北条氏康の小田原城を攻囲する。謙信、小田原城を攻囲すること数十日、軍を解いて鎌倉に入る。

③三月十六日 謙信、鎌倉鶴岡八幡宮の社前で、上杉憲政より関東管領職を譲られ、上杉政虎と改名。

八月二十九日 謙信、二万八千の大軍を率い、春日山城を出発して信濃川中島へ向かい、妻女山に布陣する。

九月十日 信玄と信濃川中島八幡原で戦う。(第四回川中島の合戦)

十二月二十七日 北条氏康、信玄と武蔵の松山城を攻撃しようとする。下総古河に滞在中の近衛前嗣はこのことを謙信に報じ、救援を要請する。謙信、関東に出陣し、武蔵の生田で北条氏康軍と戦う。厩橋城で越年。

十二月 謙信、足利義輝の二字を賜り、輝虎と改名。

西暦

年号

年齢

年譜

参考事項

一五六二

永祿五

三十三歳

二月十三日 甥の喜平次顯景の習字の上達を褒め、習字の手本を書いて与える。

二月十七日 上野の館林城を攻略する。城将赤井文六、開城して武蔵の忍城に退く。謙信、長尾当長を館林城将に任命する。

二月二十七日 関東の情勢を越後府内留守将蔵田五郎左衛門に報じ、府内・春日山城の警備を厳重にするよう命ずる。

十二月九日 長尾政景、河田長親に起請文を送る。その中には居多大明神・弥彦大明神・二田大菩薩がある。

十二月二十四日 信玄、北条氏康とともに武蔵の松山城を攻囲する。太田資正、謙信に救援を要請する。謙信、長尾政景に春日山城の留守を命じ、越後府内（府中）を出陣する。

二月四日 北条氏康、信玄とともに武蔵の松山城を攻める。城将上杉憲勝、降伏する。謙信、松山城を救援しようとしたが間にあわず、転じて騎西城を攻める。

四月十五日 小山秀綱・佐野昌綱、北条氏康に応じ、謙信に背く。謙信、佐竹義昭、宇都宮広綱とともに秀綱の下野祇園城を攻略する。ついで昌綱の唐沢山城を攻める。

十二月十九日 謙信、上野の厩橋城に到着する。

十二月二十七日 上野の和田城（高崎城）を攻める。

一五六二 徳川家康、織田信長、清洲で同盟を結ぶ。

一五六三 三河一向一揆が起る。

一五六四 永祿 七

三十五歳

一月二十九日 常陸の小田氏治、北条氏康に応じ、謙信に反抗する。謙信、佐竹義昭・下野の宇都宮広綱とともに小田城を攻撃する。

三月四日 春日山城の普請と居館の蔵の代物を実城の蔵に移動させる。

六月二十四日 春日山城看経所と弥彦神社に武田信玄の罪状を訴え、当秋中に討伐することを祈願する。

七月五日 坂戸城主長尾政景と琵琶島城主宇佐美定満とが野尻池で遊泳し、溺死する。

八月三日 謙信、信濃川中島で、武田信玄と雌雄を決することを佐竹義昭に報ずる。

一五六五 永祿 八

三十六歳

三月二十七日 本願寺光佐、武田信玄と結び、謙信に反抗する。

八月五日 一乗院覚慶(足利義昭)、居多神社神官花ヶ前宮内大輔盛貞にその息智光院頼慶(家盛)の使者として辛勞を謝する。

二月十六日 謙信、佐竹義重の参陣を促し、小田氏治の常陸小田城を攻略する。

一五六六 永祿 九

三十七歳

三月 千葉胤富の属城下総臼井城の原胤貞を攻める。胤富、北条軍と胤貞を救援する。謙信、引きあげる。

五月九日 関東から帰国する。足利義昭の要請をうけ、北条氏と和睦し、武田信玄を討滅して上洛し、京都・鎌倉両公方を擁立することを神仏に祈願する。

一五六四 第二国府台の戦い。北条氏康軍が里見・太田の連合軍を破る。

三河一向一揆が平定される。

西暦	年号	年齢	年譜	参考事項
一五六六	永祿九	三十七歳	十二月二十日 謙信、関東に出陣し、沼田(倉内)城に入る。	二五六七 伊達政宗、誕生。
一五六七	永祿十	三十八歳	四月六日 厩橋城將北条高広、小田原北条氏に応じ、謙信に背く。北条高広討伐を命ずる。	織田信長、斎藤竜興の稲葉山城を落とす。岐阜城と改め、岐阜に移る。
一五六八	永祿十一	三十九歳	十二月 駿河の今川氏真、武田信玄と対立し、謙信と和睦しようとする。遊雲斎永順を遣わす。謙信、僧要明寺を駿河に送り、これに答える。	松永久秀が、東大寺大仏殿を焼く。
			三月 椎名康胤、謙信に背く。越中に出陣し、金山城攻略。	一五六八 織田信長、足利義昭を奉じて入京。
			五月七日 生母、病死。法名青岩院殿天甫輝清。	足利義昭は、室町幕府第十五代将軍となる。
			九月二十二日 織田信長、足利義昭を擁立して京都に入ろうとし、近江で謙信に報ずる。	
			十月 景勝に自筆の習字の手本「いろは」を書く。	
			十二月七日 謙信、本庄繁長の本庄城を攻囲する。	
			十二月二十五日 甲・相・駿の和(三国同盟)が破れ、今川氏真、武田信玄に敗れ謙信に救援を要求する。	
一五六九	永祿十二	四十歳	二月六日 地下人に対し槍・縄・鉤を持って参陣した物には褒美を与えるという触れを出す。	二五六九 宣教師のルイス・フロイスが織田信長に謁見。
			二月八日 足利義昭、智光院頼慶(花ヶ前家盛)を謙信に遣わし、織田信長に越・甲和議の斡旋を依頼したことを伝える。	宣教師の京都居住が許可される。

三月十四日 越相同盟が成立する。

⑤月二十日 越後国内に棟別銭を課し、伊勢大神宮の遷宮費にあてる。

六月九日 広泰寺昌派を小田原に派遣し、北条氏康、氏政父子の誓書と氏政の子国増丸を養子とすることを求める。氏康父子、誓書を謙信に送る。

十一月五日 河田長親、居多神社神官花ヶ前盛貞を越中宮津八幡宮の社職とする。

三月五日 北条氏康の子三郎を養子とし、代わりに柿崎景家の子晴家を入質として小田原城へ送ることにする。

四月十日 三郎と上野沼田城で対面する。

四月二十五日 養子三郎に自分の初名景虎を与え、姪の故長尾政景の娘を景虎の室とし、春日山城二の郭に置く。景虎十七歳。

九月五日 武田信玄の上野厩橋城侵攻の報を聞き、越後府内を出発して上野に布陣する。

十月八日 徳川家康、誓書を送り、武田信玄と絶ち、謙信と提携しようとする。

十二月十三日 春日山城看経所に越中平定の祈願文を納める。これより法号「謙信」を称す。

一五七〇 柿川の戦い。織田信長が、浅井長政・朝倉義景の連合軍を破る。

石山本願寺が織田信長に対して挙兵。

(中国で「西遊記」)

西暦

年号

年齢

年

譜

参考事項

一五七二 元亀 二

四十二歳

二月六日 徳川家康、謙信に新春を祝賀して太刀を贈る。

二月二十八日 越中に出陣し、椎名康胤の富山城を攻める。

四月十七日 伝馬・宿送の印鑑を定める。

五月二日 大石芳綱・栗林政頼に浅貝寄居城を築かせ、上田の兵に守備を命ずる。

十一月十三日 常陸の佐竹義重、武田信玄に应じて、常陸小田氏治等と戦う。氏治の救援に応じ、謙信、上野総社城に出陣。西上野に侵攻し、氏治を救助する。

一五七二 元亀 三

四十三歳

一月十五日 北条氏政、謙信と断交し武田信玄と和睦する。

○一月三日 武田方の上野石倉城を攻略し、厩橋城に入り、ついで武田信玄・北条氏の兵と利根川をはさんで対峙する。

八月十八日 越中新庄に出陣して一向一揆の立て籠もる富山城を攻撃する。

九月十八日 長尾顕景・山吉豊守に春日山城の警備を厳重するよう命じ、武田信玄の来襲に備える。

十月二日 越中富山城を攻略する。

十一月七日 織田信長、武田信玄と国交を絶ち、謙信と結ぶ。信長、子息二人を養子に出すことを誓約。

一五七二 織田信長、延暦寺を焼き討ち。

一五七二 三方ヶ原の戦い。武田信玄が徳川家康に勝利。

一五七三 天正 元

四十四歳

一月 越中に入つて一向一揆を討伐する。

五月十四日 河内忠清・庄田隼人に越中境海岸の守備を厳重にさせ、直江景綱・鮎川盛長に春日山城の修築（実城・二の郭・三の郭に塀を築造）を命ずる。

六月二十六日 上野白井城主長尾憲景に武田信玄の逝去を報ずる。

八月十日 越中に入つて一向宗徒を討伐。進んで加賀朝日山城を攻める。

十二月十六日 足利義昭、紀伊に逃れ、謙信に足利家再興を頼む。

一月二十六日 関東出陣の触れを出す。

二月五日 上野沼田城に入り、徳川家康と策応して武田勝頼を討伐しようとする。

三月 織田信長、謙信に狩野永徳筆の洛中洛外図屏風を贈る。

四月十三日 北条氏政と利根川を隔てて対陣し、金山城主山良成繁を攻撃する。

九月五日 謙信軍、北条氏政軍と上野黒川谷・御覧田で戦う。

十一月七日 北条氏政方の由良成繁の上野金山城を攻め、利根川を渡つて武蔵鉢形城下および忍・騎西領内に放火。

十二月十九日 謙信、剃髪し紀伊高野山の僧清胤を師とし、護摩灌頂を執行して法印大和尚に任ぜられる。

一五七三 武田信玄、死去。

織田信長が、足利義昭を京都から追放。これにより、室町幕府が滅亡。

織田信長が、朝倉義景、浅井長政を攻略。

一五七四 織田信長、長島の一向一揆を平定。

西 暦

年 号

年 齢

年

譜

参 考 事 項

一五七五

天正 三

四十六歳

一月十一日 養子喜平次顯景に加冠して名を景勝と改め、上杉彌正少弼と称させる。

二月十六日 諸將の軍役を定めた「上杉家軍役帳」を作成。

四月二十四日 北条氏政撃滅を多聞天に祈願する。

六月十三日 本願寺光佐、大坂石山に籠城して織田信長と戦う。

光佐、謙信に援を求める。

一五七六

天正 四

四十七歳

三月十七日 越中日宮城主神保長職、謙信に援を求める。謙信、越中に進攻し、守山城・湯山城を攻略しようとする。

五月十八日 本願寺光佐と和睦。

九月八日 謙信、越中梅尾城・増山城を攻略する。湯山城を攻囲。

十二月十九日 能登を経略して七尾城を攻囲。

十二月二十四日 能登・石動城を築き、直江景綱らに守らせる。

二月十日 加賀国に出陣しようとして諸將を召集する。能登国を平定しようとして越中国に出陣、魚津城に入る。

⑦七月二十四日 能登・七尾城を攻撃。長綱連、弟連龍を近江安土城の織田信長に遣わし、援を求める。

一五七五 長篠の戦い。織田信長・徳川家康の連合軍が、

武田勝頼軍を破る。

織田信長、越前の一向・援を平定。

一五七六 織田信長、築城中の安土城に移る。

京都に南蛮寺ができる。

一五七七 織田信長、安土に築市令。

織田信長、松永久秀を攻略。

一五七七

天正 五

四十八歳

一五七八

天正 六

四十九歳

九月十三日 能登七尾城外で月を賞して詩を賦す。

九月十五日 能登七尾城を攻略。

九月十七日 能登末森城を攻略して山浦国清・斉藤朝信に守らせる。

九月二十三日 柴田勝家らの織田軍を加賀手取川で破る。

九月二十六日 七尾城を修築して鯨坂長実・遊佐統光らに守らせる。

十月二十五日 能登の諸城に制札を掲げる。

十二月十八日 春日山城に帰り、畠山義隆の未亡人三条氏を北条景広に再嫁させる。

十二月二十三日 領国内諸將八十余人の名前を列記した動員名簿「上杉家家中名字尽手本」を書く。

一月十九日 関東出陣令を出す。

二月 寿像と辞世の詩「四十九年一睡夢、二期栄華一杯酒」を作る。

三月九日 発病する。

三月十三日 春日山城で死去。四十九歳であった。

三月十五日 葬儀。法号「不識院殿心光謙信」。明治四十二年九月九日、従二位を贈られる。

一五七八 上杉景勝、
景虎と争う。

《監修》

加藤 章

盛岡大学学長

盛岡大学短期大学学部長

上越教育大学名誉教授

花ヶ前 盛明

越後の宮居多神社宮司

新潟県神社庁教化講師

新潟県文化財保護連盟理事

新潟県文化財保護指導委員

上越市文化財調査審議会委員

《参考文献》

「上杉謙信と上杉鷹山」 花ヶ前盛明著（二〇〇〇年 河出書房新社）

「上杉謙信大事典」 花ヶ前盛明編著（一九九七年 新人物往来社）

「上杉謙信」 花ヶ前盛明著（一九九二年 新人物往来社）

「カラーガイド 上杉謙信」 花ヶ前盛明著（一九八八年 新潟日報事業社）

「上杉謙信と春日山城」 花ヶ前盛明著（一九八四年 新人物往来社）

「上杉謙信」 井上鋭夫著（一九八三年 新人物往来社）

「歴史読本一九九三年十一月特別増刊号スエシャル4」（一九九三年 新人物往来社）

「上越市観光辞典」（一九九七年 上越市）

上越市発足三十周年記念事業

まんが上杉謙信ものがたり

平成十三年四月二十九日 初版発行

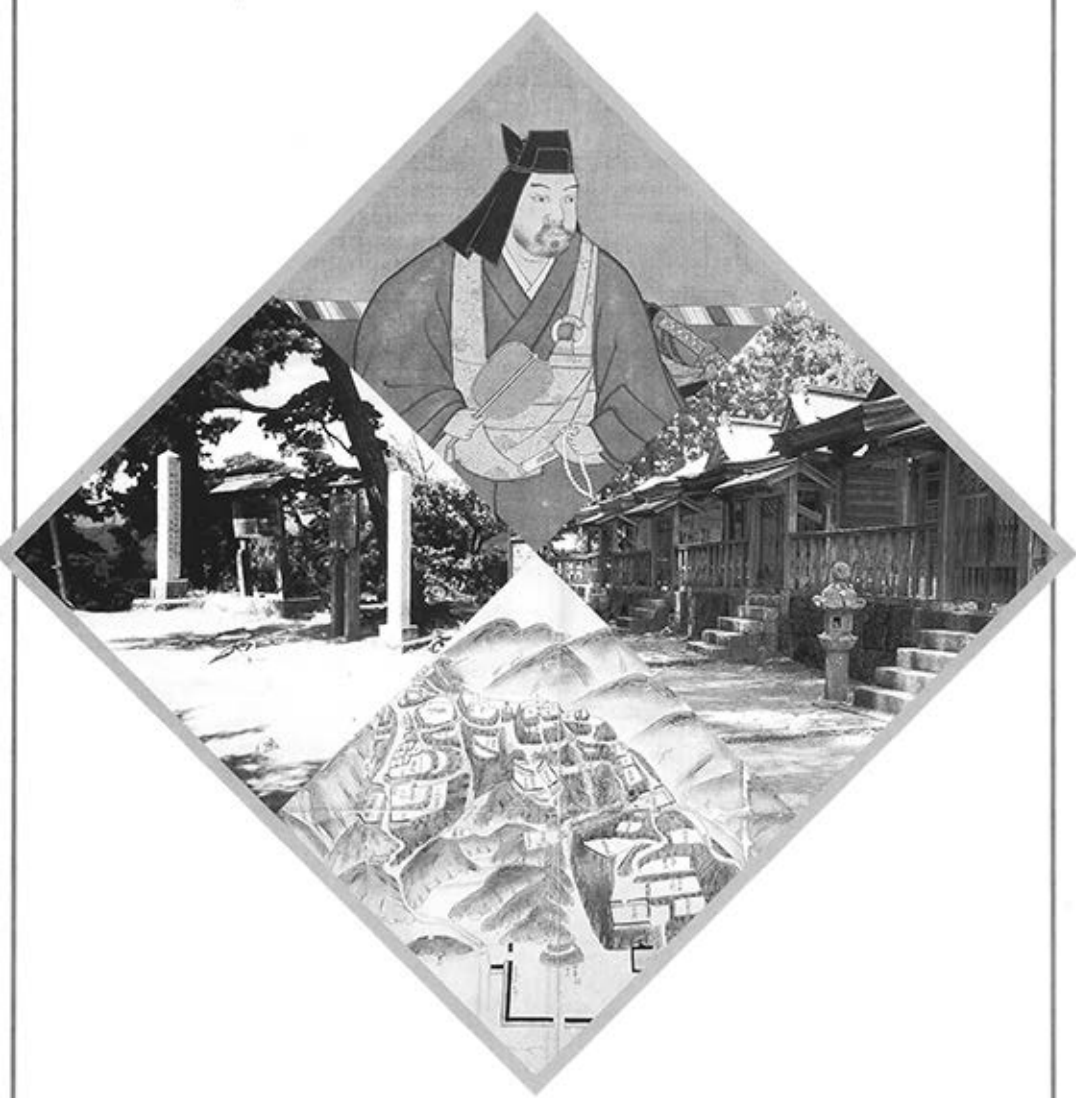
発行 新潟県上越市

新潟県上越市木田一丁目一番三号

作画 シュガー佐藤

装丁画 シュガー佐藤

印刷・製本 凸版印刷株式会社



作家／シュガー佐藤

1953年宮城県に生まれる。18歳で上京し、故石ノ森章太郎氏に師事。アシスタントとして『さんだらぼっち』『佐武と市捕物控』『流れ星五十三次』などを手がける。その後独立して、石森プロ作品『家畜人ヤブー』『北京』『マンガ日本の歴史』などに協力・執筆。

◆裏表紙の写真

上／謙信画像(上杉神社蔵)

下／春日山城絵図(新潟県立図書館蔵)

左／春日山城本丸跡

右／上杉家廟所(写真提供:米沢市)

